

2006年度 I.共通教育科目：密教美術の世界

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 雅秀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24023

2006 年度

I. 共通教育科目：密教美術の世界

1. 序論 (1) パーラ朝期の密教美術

顔がたくさんあったり、手がたくさんあったりする仏像は、どういう意図で制作されたのだろう。異形にすることで、神格化しようということだろうか。人は奇形を見たりすると怖がったりするが、シャカになると拝まれるんだなあ。

前回のスライドを見た皆さんのコメントでは、多面多臂つまり手や顔がたくさんあることに対するものが圧倒的に多かったです。これは私が強調したからかもしれませんが、皆さんにとっての仏像のイメージと、このような多面多臂の像が、かなりかけ離れたものだったからでしょう。ただし、千手観音や十一面観音、あるいは阿修羅像などで、実際には多面多臂の仏像は見ているのですが、あまり意識にのぼらなかつたようです。「異形にすることで神格化する」というのは、なかなかよい指摘です。われわれは神聖なものを表現するときに「完全なもの」「美しいもの」などのイメージを用いることが多いのですが、その逆に「不完全なもの」「醜いもの」も、神や仏などの神聖なもののイメージに用いられることがあります。場合によっては「グロテスクなもの」「身の毛のよだつもの」「正視に耐えないもの」などの場合もあります。人間はこのようなものにも引きつけられることがあるのです（「怖いもの見たさ」という言葉もあります）。そのような意味で、「人は奇形を見たりすると怖がったりするが、シャカになると拝まれるんだなあ」というコメントは、もう一歩進んで、なぜ、拝まれるものに奇形が現れるのかという発想の転換をするといいいでしょう。この授業では、今回も含め、ときどきそのような「グロテスクなのに拝まれるもの」をお見せするつもりです。

グロテスクさと神聖性が関係するのではなく、何かが多いということに重きを置かれていると思

う。なぜなら、身体が欠けたものがないからです。上にも書いたように、私は「グロテスクさと神聖性」は関係すると思いますが、「何かが多い」ということも、たしかに重要な要素でしょう。腕や顔が多いということも、それで説明できるかもしれません。千手観音の手も、グロテスクというよりも、腕が千本もあるということが、見るものを圧倒させるのでしょ（実際には千本は表さずに、40本程度のもが多いのですが）。あるいは、同じものがどんどん増えていくイメージも、生命力や繁殖力を感じさせるのかもしれません。インドでは蓮やつる草のように旺盛な繁殖力を持った植物が、宗教的なイメージとして好まれました。なお、神聖な像には「身体に欠けたものがない」というのは必ずしも正しくなく、たとえば日本の不動明王は、片目をしかめ、口の左端からは上向きに、右端から下向きに牙を出しています。不動明王の場合、アンバランスさが神聖さを表す重要なモチーフだったようです。仏像の中では例外的ですが。

密教という閉鎖的なイメージがあったが、アジア全域に広がる大規模なものだと知った。

密教という言葉は、おそらく多くの方にとってあまりなじみのない言葉でしょう。日本史の授業で、空海や最澄が中国から伝え、平安時代の初期の仏教で流行したというイメージも強いかもしれませんが、日本の密教はたしかに中国から伝えられたものですが、その源流はインドにあります。密教とは何かについては、今の段階では説明はあえてしません。インドの仏教の歴史の中で最も遅い段階の仏教で、授業でお見せするような仏像がたくさん作られたという程度でかまいません。それよりも、仏教というのがどのような宗教で、それを生んだインドの人々の考え方などを、この授

業では紹介するつもりです。密教がアジア全域に広がったというのはそのとおりです。チベットやネパール、あるいは東南アジアで流行し、その流れで中国や日本にも伝来しました。東南アジアからは密教はすでに姿を消していますが、インドネシアやカンボジアには密教の遺跡があります。このような地域的な広がりを持ちながら、密教が閉鎖的な宗教であることもたしかです。インドでは大乘仏教の中で特別な能力を持ったものが、密教の修行をしていました。大乘仏教とは別に密教があったのではなく、大乘仏教の一部として密教は流行していたようです。

トリビアで、空海が生きていると聞いて驚いた。最澄はどうなんでしょうか。日本は外国の像をマネしているんだなぁと思った。

弘法大師すなわち空海が本当に生きているかどうかは、私にはわかりません。しかし、空海が生きていると信じる人々が今も昔もいることはたしかですし、それによって、大師信仰とよばれるような宗教形態が存在してきたことも歴史的な事実です。時が至れば、弘法大師がふたたび世に現れ、われわれを救済してくれるという信仰もありますし、四国のお遍路さんは「同行二人」といって、つねに弘法大師といっしょに巡礼をしていることになっています。日本仏教の中で空海ほど一般大衆の信仰の対象となった祖師（宗派の開祖）はいないでしょう。最澄ももちろんですが、信者の数では圧倒的に多い浄土真宗の親鸞や、曹洞宗の道元も、空海のような神格化は起こりませんでした。日本各地にさまざまな伝説があるのも、空海だけでしょう。「日本は外国の像をマネしている」のはそのとおりなのですが、仏教美術というのが、そもそもかってにオリジナルな仏像を作るわけにはいかないものなのです。規範となる像のイメージを再現することが重要でした。そのとき、インドや中国の仏像こそがモデルとなったのです。これは仏教に限らず、宗教美術一般でもいえることでしょう。独創性を重視する近代的な美術とはまったく異なる世界なのです。

今まで私が見た奈良の大仏や法隆寺の観音像は、全身が彫られていて、そういうイメージだけれど、「弥勒坐像」などでは後ろに壁(?)のようなものが見られました。どのような理由からそのような違いができたのか疑問に思いました。

日本の仏像との形式の違いについての、よい指摘だと思います。インドでは仏像や仏教美術の作品は多くが、このような浮彫の形式をとります。これは、今回紹介する初期の仏教美術からの伝統です。いくつかの理由が考えられますが、そのひとつとして寺院や建造物の一部として制作されたため、その表面の装飾として浮彫が最も適したことがあげられるでしょう。初期の仏教美術には仏像は現れず、物語や装飾モチーフが好まれました。仏像であれば全身を彫ることもあったでしょうが、物語の場面や装飾モチーフの場合、浮彫の方が表現しやすかったはずです。仏像が出現してからも、寺院に安置するときには壁に密着させるような形で石像を刻んだようです。その場合、全体を彫り出すのではなく、体の後ろは彫り残して、後ろ側が平面になっている方が好都合でした。このような像を「高浮彫」と呼びます。授業で紹介する密教の仏像のほとんども高浮彫です。ヒンドゥー教やジャイナ教のような他の宗教の像も同様です。これに対し、背面もすべて彫り出す形式のものを「丸彫り」と呼びます。丸彫りの仏像も、高浮彫ほどではありませんが、どの時代にもあります。

インドと日本の仏像を比べてみて、私は思ったよりも似ていないという印象を受けました。観音像などは、日本の観音像よりも、どちらかという和阿修羅像に似ているような気がしました。

そのような印象も大事だと思います。私は「似ていると思う方が興味がわく」という戦略(?)で、似ていると強調しましたが、他の方も「あまり似ていない」「いったいどこが似ているの?」と思っていたかもしれません。少し先の授業では、この「似ている」ということについて、詳しく考えるつもりです。

仏像の名前って覚えた方がいいんですか。

無理に覚える必要はありません。何度も繰り返し聞いているうちに、自然に覚えられるものも出てくるでしょう。もちろん、覚えたい方は仏像の百科事典のようなものもありますので、せっせと覚えても楽しいでしょう。テレビなどで仏像の映像

が出て、それが瞬時にどのお寺の何という名前の仏像であるかわかったりすると、けっこううれしいですよ。世の中にはそういうひとたくさんいます。

2. 序論 (2) インドの仏教美術の流れ

・釈迦を、好きな人に置き換えると、釈迦の姿を菩提樹などで表す理由が納得できた。でも、釈迦のことをあまり知らない人にとっては、樹木や法輪よりも、その姿を像で表した方がわかりやすいと思った。

・仏像や絵画などで仏を人の姿で表すと、人の持つ「限界」というものが、仏の力にもあるということにつながる危険性があり、初期の仏教が、仏の姿を、樹木や法輪など人でない姿で表したのは、理にかなっていると思う。しかし、仏教の信仰を広めるといふ点では、もっとわかりやすいモチーフがあった方がよいだろうし、そのような理由から仏像などで、仏が人の姿で表されるようになったのだと思う。

同じような内容ですが、なかなかよいコメントなので、二人分まとめて紹介しました。たしかに仏教をひろめようとする場合、樹木や法輪などのシンボルを用いるよりも、仏を人の姿で表す方が、インパクトがあるかもしれません。また、見る人にもわかりやすいでしょう。実際、日本に仏教が伝来したときには、経典とともに仏像ももたらされました。文字情報だけではなく、イメージも必要だと考えたからでしょう。しかし、そのようなイメージ、つまり人間の姿をした仏も、その表し方には、民族や文化で違いがあります。それに比べて、シンボルはそのような差を超えて、普遍的な広がりを持つことがあります。たとえば、法輪は単なる車輪ではなく、光り輝く太陽のシンボルにもなりますが、太陽をそのように表す人々は、特定の地域に限定されません。また、われわれは釈迦を人の姿で表した方が、ありのままで、

本物に似ていると思います。本当に釈迦がそのような姿をしていた保証はどこにもありません。あくまでも、ある時代のある人々がイメージする釈迦でしかないのです。そもそも、「ありのままに表す」こと自体、厳密に言えば、不可能です。彫刻や絵画によって表現するためには、対象を変化させる必要があるのですから。なお、シンボルによる仏の表現の説明に、好きな人を例にあげるのは、皆さんにとって身近な題材であるという理由もあるのですが、宗教というのが神や仏に対する一種の恋愛感情に似たものであるからです。宗教とは合理的な判断にもとづくものではなく、もっと心情的なものです。

本当はすべての宗教は偶像崇拝を禁止したいという話が印象的でした。説明にはとても納得することができました。宗教が過激な思想に考えられてしまうのは、その宗教にいかにか傾倒しているかの表れなんですね。

「本当はすべての宗教は偶像崇拝を禁止したい」というのは、極論かもしれませんが、あえてそのように表現するのは、偶像崇拝は特定の宗教の特別な考え方であるという、おそらく皆さんの持っている「常識」に疑問を持ってもらいたいからです。「聖なるもの」は基本的に表現することができないということも、この授業でのポイントです。宗教に傾倒するのは悪いことではないでしょうが、それによって視野が狭くなったり、他の考え方を認めることができなくなると、しばしば悲劇が起こると言われています。しかし、宗教に傾倒したからといって、つねに悲劇が起こるわけではなく、

むしろ、それによって心の平安を得られる人もたくさんいます。簡単にはとらえられないのが宗教です。

私はいけない本を読んだからなのか、自分の中で勝手に解釈したのか、偶像崇拜はタブーなのだと認識していました。スーリヤという太陽の神様をスライドで見ましたが、インドでは仏と神はどのような関わりがあるのでしょうか。

「いけない本」かどうかはわかりませんが、少なくとも、仏教の場合、偶像崇拜はとくに禁止されたり、人々がそれを避けようと意識していたわけではないということです。むしろ、多くの宗教に共通する考え方として、神や仏を表すことが困難であるということを強調したかったのです。スーリヤは、古代インドのヴェーダ文献から登場する神です。仏教が現れる前のことで、西北インドからインドに侵入してきたアーリヤ人たちの信仰の対象でした。太陽神崇拜はギリシャやローマでも盛んで、アポロン名で知られる神も太陽神です。スーリヤとアポロンは起源は同じ神なので、いろいろ共通する要素もあります。スーリヤは仏教の時代でも信仰され、スーリヤを祀った寺院もあちこちで建立されました。仏教内部にも取り入れられます。仏と神の関係については、この授業の終わりの方（7月頃）で取り上げるつもりです。

ひとつの像で複数のシーンがあるのが印象的だった。ヤクシャのいろいろ多彩な表現がおもしろい。仏像が登場してからも、印や象徴を持っているのは、古代仏教の影響ではないのか。

ひとつの像で複数のシーンがあるのは、インドに限らず、世界のあちこちで見られる形式です。日本でも絵巻物などにはよく用いられます。「異時同景図」と呼ばれることがあります。仏像が登場してからも印や象徴を持っているのは、たしかに、初期の仏教美術の伝統が受け継がれているからです。そして、その伝統は密教の仏像やマンダラでも見られます。聖なるものをシンボルで表すという考え方は、それほどインドでは強力なのです。

どうしてほとんどの仏像の後ろに、丸い円盤みたいなものがあるのだろうか。お釈迦様に対する崇拜の強さはよくわかったが、いろいろな方法で表して崇拜するよりも、ひとつに限定してありのままであった方が、いいのではないかと思う。これも部族なんかの違いなのかな。

丸い円盤は頭光（ずこう）といって、頭が光り輝いていることを表しています。丸いものをくっつけているわけではありません。全身が光っている場合は、光背が表されます。「後光が差している」という表現もありますが、これも、仏の体が金色で、光っているからです。同じような表現は、キリスト教の美術でもあり、頭の上に丸い輪や、頭の後ろに同じような円形の光が表されます。「いろいろな形よりもひとつに限定」という発想は、初期の仏教美術ではほとんどありませんが、密教美術では、そのような傾向があります。すべての仏は決まった形式を持ち、それに従って表現されるからです。しかし、このような規制が加えられると、芸術は自由な力を失って、衰えてしまうのがつねです。キリスト教の中でもギリシャ正教は、イエスやマリアを表すために、厳密な規定を設けましたが、そこからはルネッサンスやその後の華やかなヨーロッパ美術は生まれませんでした。コメント文中の「ありのままに表す」ことが困難であることは、すでに述べました。

釈迦の生誕のスライドには、驚かされましたが、逆に死の推移はどうなのでしょう。その辺を表したスライドを見たいです。

釈迦の死は涅槃と呼ばれて、それを描いた作品もアジア各地に数多く残されています。日本でも涅槃は絵画で表され、涅槃図と呼ばれます。釈迦が亡くなったと言われる12月9日には、涅槃図を掛けて行う法要があちこちのお寺で行われたため、多くの涅槃図があります。涅槃の図像については、簡単な読み物が私のホームページにもアップしているので、関心がある方は参照してください。つぎの URL で「テキストを読む・図像を読む」を選んでください。

マトゥラーの仏頭を見たとき、頭の渦巻きはわかったけれど、おでこの点も説明してほしかった。おでこの点は白毫（びやくごう）といって、頭の

渦巻きと同様、仏の重要な身体的な特徴です。これについては今回取り上げます。

3. 源流としてのインド (1) パーラ朝期の密教

仏の三十二相は宗教的な理想を表すように考えられているとわかったが、中には本当に理想的なのか疑問に感じるものもあった。また、なぜ 32 なのか。この数に特別な意味はあるのか。

先回は三十二相の説明に時間をかけたので、質問やコメントにも、これに関するものが多くありました。32 という数はおそらくまとまりのよい数だったからでしょう。32 は 2 の 5 乗となるように、きれいに分割できる数です。このようなきれいな数は、しばしば「聖なる数」となります。その一方で、他のどんな数でも割れない数、つまり素数も「聖なる数」として好まれます。三十二相が理想的な姿であるかは、たしかに疑問です。むしろ、さまざまな伝承の中で生み出された「聖なるイメージ」が、ある時代にまとめられたと考えた方が適当でしょう。そのひとつひとつに意味を求めるのは困難です。手の水かきや、40 本の同じ形の歯などは、別にそれほどありがたいものではないでしょう。また、三十二相の中には、実際には図像表現することができないようなものもあります。文献によって、三十二相の内容が異なることがあるのですが、これも、はじめに 32 という数をたてて、それにあわせていろいろ組み合わせたと考えた方が自然です。

誕生が下からはじまり、涅槃が上で終わるのは、徐々に天に昇るというニュアンスなのかなと思いました。話された内的要因で、王=仏というのは、華やかな装飾（世俗的）がなされている仏像とも関係がある？

八相図などで、釈迦の生涯のできごとがどのように並べているかについては、きまった説はありません。パーラの八相図の場合、むかって左下に誕

生、最上段に涅槃がくることが多く、さらに初転法輪と舎衛城の神変、三道宝階降下と酔象調伏が、それぞれ左右に並ぶ傾向があります。これらは出来事が起こった順序よりも、全体のバランスに配慮したものとも思われます。ただし、研究者によっては、釈迦のできごとを下から上にたどることによって、その生涯を見るものが追体験し、さいごに涅槃に至るという解釈がなされることがあります。その場合、質問のような意図が込められていることになります。はなやかな装飾がなされた仏は、宝冠仏と呼んでいますが、これについては、私も王と仏のイメージの類似性が関係あると考えていますが、図像そのものがどこから来ているのかはよくわかっていません。教科書でもそのあたりは少し曖昧な記述をしています。北西インドのカシミール地方で流行した形式や、玄奘が『大唐西域記』のなかで紹介するボードガヤの像などが関連するようです。

仏像をひとつに限定すると、美術は衰えてしまうと言っていたけれど、三十二相は、細かく特徴が書かれていて、ひとつに限定してしまうことにはならないのかなぁと思った。

たしかにそうですね。でも、三十二相だけで作品はできませんし、仏像に三十二相のすべてが表されているわけでもありません。図像に関係するのは頂髻や白毫、手足鬘網相などごく一部です。三十二相は仏像を作るときの基準よりも、仏像の姿を瞑想するときのイメージのヒントのようなものだったようです。釈迦がすでにこの世にいない時代、釈迦の姿を瞑想することは、重要な修行法でしたが、同時にきわめて困難でした。そのときの指針として、三十二相は成立したようです。この

ような瞑想は観仏とか観想と呼ばれました。そのような情報も参考にしながらも、実際はその土地に伝わった造像の伝統が決定的だったのでしょう。たとえば、ガンダーラではヘレニズムの文化や北方の騎馬民族の文化、さらにインド内部からの文化などです。

仏の三十二相を知って、仏像を見た限りでは、普通の人間に見えるが、いろいろ設定があっただろいた。仏の三十二相は何を食べてもおいしいとか、声がきれいだとか、うらやましい部分もあったが、毛穴には毛がないといけないとか、脇の下がふくらんでいるとか、髻のようなものが頭の上にあるとか、現代に生きる女の私にはあまりなりたくない姿だなあと思った。

仏の姿になりたい人というのは、たしかにあまりいないでしょうね。日本の仏像でも、釈迦像のすぐれた作品も多くありますが、一般の人々に人気が高いのは観音や弥勒などの菩薩像です。大乘仏教では仏よりも菩薩の方が身近な存在なので、このような人気の度合いは当然なのかもしれませんが、イメージがもたらす効果も大きく、菩薩像は一般に高貴な男性像ということで、親しみやすいのでしょう。肉髻も螺髪も白毫もそこにはありません。なお、毛穴というのはけっこう重要な特徴で、仏が輝くときにはこの毛穴から光を放射します。そして、その場合の一番重要な毛が眉間の白毫で、ここから発射された光は全宇宙を照らし出します。このことは、先の方の授業で取り上げます。

ナーランダー遺跡を見て、少し疑問に思ったのだが、インドの古い寺院にも、日本の寺のような東大寺式、薬師寺式といった形式はあったのだろうか。

現在、発掘されている当時の寺院の遺構はそれほど多くありません。それらを見ると、インドの仏教寺院は基本的に仏塔（ストゥーパ）と僧院で構成されています。ナーランダーでもそうでしたが、この僧院の場合、増築が繰り返され、その結果、同じような規模の僧院が一行に並ぶことになりま

した。仏塔はひとつのままです。パハルプールでは、はじめから大規模僧院として設計されたようで、中庭に大きな仏塔を一基立て、そのまわりを巨大な僧院が取り囲むという形式になります。同じようなものが、インドではヴィクラマシーラという僧院が知られていますし、この形式はインドネシアにも伝わったようで、ジャワ島の仏教遺跡でも見られます（チャンディ・セウというお寺です）。ある程度の類型化は可能でしょうが、日本の古代寺院のように、明確な形式がたてられるわけではないようです。

聖界の王である仏（釈迦）を、世俗の王と意図的に同一視したことが、仏像の誕生につながったとの説明があったが、自分は仏教は世俗を嫌ってのようなイメージがあったので、違和感を感じた。話は変わるが、釈迦仏伝図のような同じ石に違う場面がいくつも描かれているものは、見にくいのに、何でわざわざひとつの石に描こうと思ったのか不思議だ。

釈迦はたしかに世俗を捨てて悟りを開きましたが、仏像をつくったのは釈迦自身ではなく、仏教徒たちです。そのほとんどが世俗の世界で生きていた人々でしょう。僧侶自身が岩を刻んで仏像をつくったのではなく、工人たちです。また、仏像を待ち望んでいた人々も世俗の人たちがほとんどだったでしょう。僧侶が生きていく上でも、世俗の人の寄進や布施が必ず必要です。そのような人々にとって、見たこともない仏のイメージをつくり出すときに、実際に存在してる王のすがたや肖像は大いに参考になったのでしょう。なお、インドでは、世俗の世界よりも聖界が上位におかれるという考え方が支配的なのはたしかです。たとえば、いわゆるカースト制度では、僧侶階級であるバラモン（ブラーマン）の方が、戦士階級であるクシャトリアよりも上位におかれます。そのような意味では、世俗の王との同一視は、インドの中ではやや邪道かもしれません。最後の質問の、複数の場面をひとつの石に刻むという伝統は、初期の仏教美術のパールフットやサーンチーでも見られる伝統的なものです。絵巻物のようですが、実際は

それほど単純には筋をたどることはできません。時間の流れよりも空間の配置が優先されることがあるからです。

聖なる領域の頂点と、世俗の領域の頂点のイメージが共通しているというのは、今の感覚からすると理解しづらいと感じた。通常、二つの領域は別々に聖なる領域の方が上位にくる感覚である気がする。三十二相のようにかなり細かいことまではっきりと規定したのは、当ても「仏＝王」とい

うイメージが、当然のように受け入れられるものでなかったことも表しているのではないかと思った。

聖なる領域と俗なる領域については、上に書いたとおりです。「<仏＝王>というイメージが、当然のように受け入れられるものでなかった」という指摘はおもしろいですね。三十二相そのものの役割がさらに大きくなります。私も検討してみたいと思います。

4. 源流としてのインド (2) 日本密教の源流？

菩薩（観音？）は釈迦の若いころの姿と聞いたことがあるのですが、明王は釈迦とどういう関係にあるのでしょうか。

菩薩とはいかなるもので、どのような姿をしているかについては、今回取り上げますが、釈迦の若いころの姿という説明が当てはまるものもあります。菩薩とは「悟りを求めるもの」という意味なので、釈迦そのものが菩薩のモデルになります。明王はなかなかむずかしい存在です。種類としては不動、愛染、降三世、大威徳、軍荼梨などがありますが、それぞれ起源が異なります。インドでは明王としては扱われていない孔雀明王や、中国でおそらく成立した大元帥明王なども、日本にはいます。これらの明王のイメージは、仏や菩薩と大きく異なり、多面多臂、忿怒形などを特徴としますが、その起源や由来は一樣ではありません。明王と他の仏との関係ですが、仏が衆生を救済するために、柔和な姿をとったのが菩薩、忿怒の姿をとったのが明王という解釈があります。たとえば、大日如来の忿怒形が不動明王です。これを三輪身説（さんりんじんせつ）といいます。ただし、このような解釈は日本と中国だけのようで、インドまではさかのぼれません。

今日の授業であらためてインドと日本の距離を再認識して、仏像のそれぞれの大きな特徴がちゃん

と伝わっているのがすごいと思いました。また、これほど離れている日本に伝わったのに、インドの西の国にはどうして密教は伝わらなかったのですか。

この分野の研究をしていると、インドの仏教のさまざまな要素が、じつに正確に日本まで伝わっていることに驚かされます。仏像のような視覚的な分野はそのわかりやすい例ですが、仏教の教えのような抽象的なことも、あるいは儀礼のような複合的なものも、インドと日本を比較すると、正確な情報が伝わっていることがわかります。インドの西の国にも、大乘仏教の時代までは伝わっています。有名なパーリ語の文献で『ミリンダ王の問い』（ミリンダ・パンハー）というのがあり、ギリシャの王と仏教の学僧との対話で構成されています。シルクロードを経由して仏教が中国に伝わるルートも、西北インドをから伝わっていきました。おそらく通商のためのルートに乗って、文化や宗教が伝わったからです。しかし、密教の時代にはすでにインド内部においても、仏教は劣勢に追い込まれていました。北東インドと、北西インドにかろうじて残っただけで、さらに、イスラム教徒の侵攻にもさらされていました。まさに西からの圧力に必死で耐えていた時代ですから、その西に文化を伝えることなど、およそ考えられなかったでしょう。ただし、少し後の時代になる

と、密教ではありませんが、ヒンドゥー教の思想や文化が、イスラムにも影響を与えます。なかなかインドは「したたか」です。

仏教の伝達の過程で、中国を通ったのなら、日本に伝達されたときは中国の密教と似たものになってないとおかしいはずなのに、なぜ、日本の仏教はインドのそれと似ているのだろう。

中国の密教にも似ています。というより、日本密教の直接の情報源は中国密教でした。授業ではインドと日本をダイレクトに比べたので、中国が抜けてしまいました。ただ、現在の中国には、日本密教がお手本とした唐代の密教の文化遺産はほとんど残っていません。それでも、たとえば法門寺というお寺から最近発掘された文物に、そのような密教関係のものが含まれていて、話題を呼んだことがあります。中国のことですから、これからそのような発見があるでしょう。あるいは、日本に残っている密教関係の仏像や仏画に、中国から運んだ（「請求する」といいます）ものもあります。

両義性について、昔も今もあまり変わらないなあと思った。女子高生は同じようなキャラクターのグッズを持っているし、同じような色を好んでいると思う。そのような人間の嗜好が、イメージの普遍性に一役買っているんだなあと思った。

宗教的なイメージやシンボルに、しばしば両義性が関係することを、先回はお話ししましたが、「そう言われればたしかにそうだ」という感想が多く見られました。気をつけてみれば、他にもいろいろ該当する例が見つかると思います。この方のコメントは、それとは少し異なるもので、イメージの普遍性についてです。女子高生の嗜好はよくわかりませんが、イメージの嗜好が社会集団や社会階層で異なることはよく見られます。その一方で、それを超えた普遍性を持つこともあります。話は少しずれますが、先日、京都国立博物館で「大絵巻展」という展覧会を見てきました。その中に有名な「鳥獣人物戯画」がありました。カエルとウサギが相撲をとっていたりする有名な

ものです。その場面以外にもウサギが何度も登場するのですが、どれもとてもかわいくて、魅力的で、そのまま、キャラクターになりそうです。実際、京都国立博物館のミュージアム・ショップでは、「鳥獣人物戯画」を使った商品をたくさん販売しています。ウサギというキャラクターはたとえばピーター・ラビットやミッフィー（うさこちゃん）のように、現在の子ども向けの重要なキャラクターにもなっています。サンリオのキティちゃんは、海外でもかなり人気があるようですが、イメージの作り方は、ブルーナのミッフィーを明らかに意識しています。このあたりにもイメージの普遍性があるかもしれません。

変化してしまうイメージはしかたのないことであると思う。これに対してどちらがよいとか悪いとかいう人がいるかもしれないが、オリジナルと不完全なコピーは、その差異によって、別のものと見た方がいろんな側面からよいと思う。

私もそう思います。さらに積極的な見方としては、オリジナルとコピーで異なる場合、その理由を考えることによって、それぞれを生み出した文化の特徴などが見えてくることです。この授業のねらいは、オリジナルを突き詰めていくのではなく、文化の多様性を宗教を通して知ることです。どの時代の仏教が「正しい」とか「良い」とかという判断は、まったく考えていません。

なぜ観音は鹿の衣を身に付いているのだろうと思った。鹿の衣を身につけるといことは、鹿を殺してはじめて身につけられるのだから、これはあんまりよくないんじゃないかと思った。

鹿の衣は、インドでは行者が瞑想をするときの敷物として用いられます。地面の上に直接坐るのではなく、座布団代わりに用いるのです。また、観音はこのモチーフをヒンドゥー教の神であるシヴァから受け継いでいます。シヴァは修行者のイメージを持った神で、ほかにも修行者と結びついたいろいろな特徴があります。仏教の仏のイメージには、このように、ヒンドゥー教の神からの影響がしばしば見られます。教科書でも、この点はし

ばしば強調しています。なお、鹿の皮は日本の山伏も腰に付けています。彼らも山の中で修行する行者ですが、布の衣だけでは、山の中ではおそらく耐えられないのでしょう。

やはり腕や顔、足が多い人間離れた仏像は、人々にとても強いイメージを与えたのだと思う。でなければ、インドから日本までの長い道のりは渡ってこれなかったと思う。文献で伝わったというが、どうやって文字を解読したのか。

たしかにイメージそのものが強烈な印象を残すことも、イメージの伝播には重要だったでしょう。密教美術の場合、それに加えて、仏像や仏画などのイメージは、正確に再現されて、儀礼に用いられたことが重要です。密教の実践にはイメージが必要だったからです。文字は中国ではインドの言語から中国語に翻訳しました。日本の場合、同じ漢字文化圏なので、中国でその翻訳（漢訳経典）を書写して伝えました。

5. 多様化する仏たち (1) パンテオンの構造

一神教、多神教、アニミズムの話聞いて、人間は自分の宗教は他の宗教と違い特別なんだ、優れているんだと思込んでいるんだなあと思った。そういう考えが、昔から数々の戦争を起こす引き金となっている事実は恐ろしいことだと思う。

一神教と多神教、アニミズムの話は、神や仏の話をする時、質問やコメントで言及されることが多いので、あらかじめ、こちらから説明しておきました。イラク問題などに関するマスコミの論調では、「イスラム教とキリスト教の文明の衝突」とか、「一神教を信じるものには多神教の寛容さが無い」とかが多いことが気になっています。知識人のふりをしたタレントが、知ったかぶりでこのようなことを言っているのも、よく見ます。わたしは基本的に宗教に優劣はないと思っています。一神教よりも多神教の方が優れているとか、多神教の方が寛容とかと言うことはできないし、もともと、それほど単純に宗教を二つに分類することも不可能です（このことは授業でも強調しました）。ただし、宗教には「できのいいもの」と「できのわるいもの」があるとは思っています。たとえば、仏教やキリスト教、イスラム教のように、何千年もの長い歴史を持ち、特定の民族に限定されない宗教は、「できのいい宗教」でしょう。いずれも教義（教え）の体系がしっかりしていますし、人類に普遍的な問題を扱っている宗教です。

だからこそ、われわれがそれを研究する意味もあるのです。これに対し、たとえばオウム真理教は、社会現象としては今のところ重要ですが、その教えの内容はきわめて貧弱です。千年はおろか、あと数十年もたてば忘れ去られる宗教でしょう。なお、「宗教が戦争を引き起こす」ということですが、そのように見えても、じつは宗教が決定的な要因になった戦争というのは、人類史上それほど多くはないでしょう。しかし、宗教という大義名分があると、人を操作することが簡単になります。利権つまり金儲けのために戦争をしろと言われたら抵抗があるでしょうが、「お国のために」と言われれば、喜んで戦争に行く人がいるのです。イラク戦争では「自由と民主主義のために」というフレーズをよく聞きますが、同じ構図です。

「民間信仰」という言葉はよく耳にするし、今日の授業でも出てきたが、そもそもの「民間信仰」とは何を意味するのですか。仏教などの「宗教」とは何が違うのですか。

民間信仰も宗教の一部です。民間信仰と仏教などの境界線もあいまいです。というより、仏教もキリスト教も、民間信仰をその内部に含んでいますし、民間信仰という基礎の上に成り立っているという見方もできます。民間信仰を持たない民族や文化は、おそらく存在しないでしょうし、日本

にもさまざまな民間信仰があります。仏教や神道などには収まらない習慣や風俗、宗教行事を考えてみてください。現在では仏教などの一部になっているものも、その起源は日本土着のものもたくさんあります。インドの民間信仰には、樹木信仰や女神信仰、ヤクシャ信仰などがあります。ナーガやマカラなどの想像上の動物への信仰も、それに加えることができます。これらは、仏教やジャイナ教のように特定の開祖を持たず、教えの体系も明確ではないなどの特徴があります。仏教、とくにその造形表現を知る上では、このような民間信仰を視野に入れる必要があるのです。

観音という言葉が尊名なのか、仏（如来）や菩薩のような称号のようなのか、今日の問題を見てると紛らわしい感じがした。なぜ、観音だけ仏などと同様に、カテゴリズされるほど、多様化したのだろうか。

観音についてのもっともな質問です。本来、観音は菩薩の一人で、弥勒や文殊などと同じレベルです。しかし、インド以来、観音にはさまざまな種類のものが現れ、その総称として「観音」の語が用いられました。このようなさまざまな観音を「変化観音」（へんげかんのん）とも言います。千手観音、十一面観音、不空罽索観音、馬頭観音などはよく知られたものです。そうしますと、ちょうど阿弥陀如来、釈迦如来などと同じように、観音がグループ名になり、これに対して日本仏教では古くから「観音部」を立てていました。なぜ、観音にこのようなさまざまな種類があるのかは、よくわかりません。『法華経』の「普門品」という章に、観音がさまざまな姿をとってわれわれを救済するという話があり、それを理由に挙げることもあります。実際にさまざまな変化観音がすでに信仰されていたから、このような経典が作られたと見た方が自然です。むしろ、観音がもつ「慈悲」という特徴、女性的なイメージ、シンボルの蓮の象徴性などが、このような多様性に結びついているのではないかと考えています。この問題は教科書の第五章でも取り上げています（あまり明確な答えは出していません）。

宗教は大昔、固定されてしまっているものだと思っていました、が、弥勒菩薩が如来になったりと、仏教は変化するものなのですか。と言うか、宗教とは現代にも有様が変化していくものなのでしょうか。多様な仏像を見ていて漠然と感じました。

宗教とはダイナミックに変化していくものです。とくに、多くの信者を持ち、活気のある宗教ほどそれがあてはまり、「生きている宗教」と呼ぶこともできます。逆に、神々の機能や位置づけが固定化した宗教は、あまり長続きはしないと思います。仏のイメージや地位が変わることは、おそらく仏教の歴史ではつねに起こったことでしょう。たとえば、地蔵は菩薩の一人ですが、現在の日本では小さな童子の姿で表され、およそ菩薩には見えません。人々の間で菩薩として信仰されているかも疑問です。むしろ、交通安全や子どもの守り神のような役割を果たすことが多いのではないのでしょうか。道祖神に似ています。

仏、菩薩、忿怒尊、天、群小神という上下関係があったことは今まで知らなかった。仏の上の別格の仏が、その他を映し出しているということですが、それははじめからそう考えられていたのですか。それとも後になってそう考えるようになったのですか。

はじめからではありませんが、釈迦以外にも仏がいるという考えは、かなり初期の仏教文献にも現れます。釈迦自身の言葉として、すでに過去の仏が見いだした真理を、私も見つけたのだという意味のものがああります。複数の仏がいて、いずれも同じ教えを説いていたという考えができれば、それらの仏を生み出すような、根本的な仏を想定するのも自然な流れです。このような根本的な仏を「法身」（ほっしん）と呼び、釈迦などの現実の世界に現れる仏を「色身」（しきしん）といいます。このあたりのことは資料集の「一仏から多仏へ」というところに、少し資料をあげておきました。今回、時間があれば少しふれます。

インドの唯一の十一面観音を見てみたいと思った。広隆寺の弥勒菩薩の型の像がインドにないのに驚

いた。

インドの十一面観音の写真は、教科書の185頁にあげておきました。浮彫なので、あまりよくわからないかもしれませんが。広隆寺の弥勒菩薩に似たポーズの像はインドにもあります。ガンダーラやマトゥラーの菩薩像に現れ、図像的なつながりもあるようです。ただし、そこでは弥勒がこのポーズをとっているのではなく、観音や他の菩薩の姿勢です。弥勒と半跏思惟のポーズが結びついたのは中国で、朝鮮半島や日本はその影響下にあったのです。

神々にもいろいろありましたが、漢字で書かれているものと、カタカナで書かれているものがある

のはなぜですか。中国で翻訳されなくて、日本に伝わらなかったから？ また、一番人気の仏（神）はどの国、どの時代でも釈迦なのですか。

カタカナ表記については基本的にはそのとおりです。後期密教の文献は中国には伝わらなかったものが多く、その中に登場する仏は漢字で表せないもので、カタカナになります。また、あまり漢訳が知られていないので、もとのサンスクリットをそのままカタカナで表記する場合があります。一番人気の仏は国や地域、時代で異なります。おそらく日本の仏像の作例で最も多いのは仏であれば阿弥陀か薬師、菩薩は観音、明王は不動でしょう。地蔵も多いでしょうね。意外に釈迦像はそれほど多くはないのです。

6. 多様化する仏たち (2) 画一化するイメージ

釈迦や弥勒に性格などの細かい設定はあるんですか。人の形を信仰するようにも、曼荼羅にあるシンボル化されたものの方がわかりやすく信仰しやすいような気がします。

仏の性格というのはあまり考えたことがないので、よくわかりません。「悪い性格の弥勒」とか「暗い性格の文殊」とかいうことはありません。彼らは皆、広い意味では仏なのですから、慈悲深く、智慧にあふれたすぐれた性格の持ち主でしょう。先週の授業では、仏を人工的に作るというような話をしたので、あとから性格を与えることも可能なような印象を持ったかもしれませんが、基本的に仏というのは人々の長い信仰の歴史の中で形成されたものですから、簡単にその性格を足したり引いたりできるものではないのです。その中で、密教の経典では、それまでのこのような伝統を逸脱するかのように、新たな仏を次々と生み出しました。そのため、イメージが追いつかなかったことは授業でも紹介しましたが、性格も同様でしょう。仏のイメージもしばしばその仏の役割や性格に結びついています。密教の仏にほとんど物語や神話がないことも、これと同じ理由です。なお、

曼荼羅の中のシンボルの方が信仰しやすいというのは、人によって異なると思います。イメージが画一化していく中で、相互の仏を区別するためには有効だったでしょう。

細かい部分にまで仏が描かれているマンダラがあって驚いた。マンダラの中心に位置している仏は、いずれのマンダラでも共通しているのですか。

マンダラはたいてい細かいところまで仏が描かれています。チベットではそれを砂で作ったりするので驚きです（これはもう少し先の授業で紹介します）。マンダラの中心に位置しているのは、日本の金剛界と胎藏界という代表的なマンダラの場合、大日如来です。しかし、それ以外にも釈迦や阿弥陀、弥勒、あるいは密教のその他の仏を中心とするマンダラもあります。これらは別尊曼荼羅と呼ばれます。インドやチベットではさらに多くの種類が生まれ、そこでは大日如来が中心にいるマンダラの方が圧倒的に少ないです。新しい経典ができると、登場する仏たちの顔ぶれもがらっと変わり、その経典で最も重要な位置を占める仏がマンダラの中心を占めます。そのため、チベット

のマンダラの中心の仏の名前は、ほとんど日本では知られていない仏たちです。

仏の画一化は、あまりに多くなりすぎた仏を、すべて表すのに使われたように感じた。チベットの十忿怒尊は、ぱっと見、スタンプを使って同じものに、名前だけ変えたように見えた。このようなもので、他の人にわかるのだろうか。

たぶんわからないでしょう。私もわかりません。下に書いてある名前でも区別します。細かいところまで観察すれば、持ち物が少し違うので、それを文献の記述（持ち物が何であるか規定されています）を参照して、区別することもできますが、かなり手間がかかります。チベットではこのような画一化した仏の図像集がいくつもありますが、その起源はインドにまでさかのぼります。何百、何千という仏を作り出すには、これが最も効率がいいのです。なお、スライドで紹介した五百尊図像集というのは、版画でできています。同じような図柄ではないところも、スタンプを押したような感じがします。十忿怒尊については、以前、論文を書いたことがありますので、興味がある方は読んでみてください。

森 雅秀 1991b 「十忿怒尊のイメージをめぐる考察」『仏教の受容と変容 3 チベット・ネパール編』立川武蔵編 俊成出版社、pp. 293-324。

イメージの画一化は詰まるところ、偶像のある意味での完成、言い換えるなら象徴の象徴化につながる。哲学や芸術など、多くの文化に言えることだが、ある外形の構造的な完成は、それ自体が普遍的な性質を持つものとして扱われるようになるのに加え、ある意味、古典的かつそれにより生きている体系と見られなくなる。これの打開策は多くの場合、体系の破壊やそれに準ずるようなコペルニクス的転回であり、このため当時の仏教にはその体系的安定とともに、時代との摩擦による行き詰まりが生じ始めていたと思う。

途中、少し意味がわかりにくいところがありますが、主張していることはおおむね納得できます。要約すると、システムが安定すると、一種の停滞

が起こり、その刷新がつねに求められるということでしょうか。たしかにそのようなこともあるでしょう。イメージの画一化は一種のシステムの安定ですが、発展性がなくなるという否定的な側面もたしかにあります。しかし、その一方で、安定することによって、生命力を維持するということもあります。実際、インドだけでも密教の時代は数百年続きましたし、日本やチベットではそれが現在に至るまで残っています。

イメージの画一化、各尊固有のシンボルを設定することは、八相図のそれが省略されていったものにも近いところがあるように思った。

そのとおりです。伝統的な説話図が礼拝像に転換していく過程で、説話的な要素がしだいに省略され、最も基本的なシンボルのみが残ったことも、一種のイメージの画一化と呼ぶことができます。これは偶然の一致ではなく、この時代の仏教美術全体が、同じ方向に進んでいったことを表すでしょう。

最後に先生がおっしゃった「人間が仏を動かす」ということが、いまいちピンときませんでした。

これについて疑問を感じた方が、質問のカードを見ていたら多かったです。たしかに、中途半端な説明だったので、わからなかったと思います。ひとつは、儀礼との関係で、マンダラを用いた儀礼では、仏をマンダラに導き、そこにとどめるという作法があります。その場合、仏をコントロールする必要があるのです。これについては、マンダラのところで取り上げます。授業ではあまり説明できないと思いますが、密教独自の瞑想法も関係があります。密教では仏を目の前に出現させ、これに礼拝や供養を行ったり、自分とその仏が一体となる瞑想法が盛んに行われました。そこでは、仏を自在に操る能力が求められます。また、その場合、シンボルから仏を生み出すという手続きをとりますが、これも仏がシンボルに還元されているから可能なのです。

マンダラはあんなにも多くの仏がいても、仏がよ

く似ていて、全体的に作品としてまとまっているから、こんなにきれいなんだと思うけれど、多様化してひとつひとつの仏の個性が薄くなってしまふのは残念だ。それでも、八大菩薩の文殊のように、作品のまとまりを少し壊してでも、古くからの自身のイメージを持ち続けるものもいるのですごいと思った。逆に、いくつかの仏のイメージをひとつの仏に集めたりすることはなかったのですか。

八大菩薩は伝統的な菩薩を集めたグループなので、文殊をはじめ、個性が残っている仏が比較的多い方です。後世のマンドラに出てくる人工的な仏のグループは、ほとんど個性を失っています。いくつかの仏のイメージをひとつの仏に集めたというのは、あまり思いつきませんが、特定の仏の特徴が、グループ全体で共有されるようになることはしばしばあります。

今日学んだ内容の「シンボルを設定することで、大量の仏を生む」は、教科書の内容と同じであり、教科書のおかげで理解しやすかった。教科書をもう少ししっかり読んで、授業にのぞもうと思った。ぜひそうしてください。せっかく高い教科書を買っていただくのですから、おおいに利用してください。授業では教科書どおりの内容は話しません、教科書をあらかじめ読んで授業にのぞむと、理解度は確実に高まります。

ガンダーラの「初転法輪に向かう釈迦」の中に、天使のようなものが描かれている。仏教にも天使のようなものがあるのだろうか。

同じ質問が他にも数人いました。天使のようなものは、天使です。でも仏教に天使はおかしいですよ。ガンダーラ美術はヘレニズム文化の影響を受けていますが、このような羽の生えた童子の姿

は、ヘレニズム世界のギリシャやローマでも見られます。そこでは「ブトー」と呼ばれることもあります。キリスト教の天使も、この図像を受け継いだものです。

説法をするのが菩薩で、仏は基本的に何もしないということだったが、悟っていない菩薩がまちがった（悟りとは異なる）ことを説法してしまったときはどうするのか。というか「悟り」は修行をしている菩薩ひとりひとりで内容が違うはずであり、別々の人にそれぞれ説法をしてもらい、互いの説法において矛盾が出てしまったとき、聞き手にとって「悟り」に対する考え方に疑問を持つことがなかったのだろうか。仏教において、「悟り」とはひとつだけではないのですか。

大乘経典では説法をするのは菩薩で、仏は何もしないという説明をしたので、驚いた方も多いでしょう。しかし、この場合、菩薩は自分の意志で説法をしているのではなく、仏の「威神力」（いじんりき）によって説法を行っています。いわば仏の操り人形のようなものです。また、その場合、説法をするのは文殊や弥勒、観音など、大乘仏教の菩薩であることが重要です。同じ仏教の修行の身でも、釈迦の弟子たちは、むしろ、そのような教えについて行けない保守的なものとして現れます。菩薩はたしかに修行中なのですが、大乘経典に登場する大乘菩薩は、むしろ仏と同格の存在なので、誤った教えを説くことなどあり得ません。

「教えを説く」というのは「真理を説く」ことであり、大学のいい加減な教師のいい加減な講義とは違うのです。その場合の「真理」すなわち「悟り」の内容は、かならずひとつしかないというのが、仏教の立場です。もっとも、歴史的に見れば、同じ仏教でも時代や学派で異なります。それはまた別の話になります。

7. 仏塔という宇宙 (1) 仏教世界観

「私」の範囲とはとてもあいまいなものなのだと思った。自分の考えでは、「私」というのは、誰か他の人が意識してくれない限り、いないのと同じだと思うので、「私」の範囲は「私」を意識してくれるまわりの人も含んでいるのではないかなと思う。

先週の授業のテーマは、「私と宇宙」でした。そして、隠れたテーマが「生命」です（これは今回の授業にも関連します）。「自己とは何か」「私とは何か」という問題提起をしましたが、「なるほどと思った」「わからなくなった」「考えたこともなかった」というような感想が多くありました。もちろん、そんなに簡単にわかる問題ではありませんが、これまでの学校教育では、あまり取り上げられなかった問題なので、新鮮に感じたのではないのでしょうか。このような問題には正しい答えや結論はありません。いろいろ考えることが大事なのです。その中で、「誰か他の人が意識しているから私がある」というコメントは、なかなかするどいと思いました。私はこのテーマを授業で取り上げるとき、導入として、ある少女のエピソードを使うことがあります。13 歳まで親からもまったく無視されて、ひとつの部屋に閉じこめられて育った少女で、他人との接触も皆無でした（ひどい幼児虐待です）。その少女は助け出された後、専門家から教育を受けたのですが、自分と他人の区別が、どうしてもつかなかったそうです。他人のいない世界で成長した少女には、自分を自分としてとらえることができなかつたのです。自分しか存在しない世界には、自分さえもないのです。

脳自体では私だとは思えないというのは、脳自身が肉体と精神をつなぐ唯一のプラグであるだけだからだと思う。つまり、精神、脳、肉体の三つがそろって、はじめて自分自身として認識できるのだと思う。だから、脳が死ねば、精神と肉体がつながらなくなるから、自分を感じるができな

くなるのだと思う。ちなみに、人が死んだら体重が 21 グラム減るって聞きました。その 21 グラムは魂（精神）の重さだそうです。

そのように考えることもできますね。自分のアイディアを示してくれたのは、とてもいいことだと思います。この考えにも、反論することは可能です。脳、精神、肉体という 3 つのグループに分けるということ自体、脳に何らかの優位を与えていることになります。これは前回の授業の「私の最後の砦」を別の言葉で表現しただけなのかもしれません。肉体と脳をわけるとということにも、納得できない人も出てくるでしょう。むしろ、医学的には脳も肉体の一部と見た方が自然だと思います。また、脳と、その他の中枢や神経との境界はどこにあるのでしょうか。というように、いろいろご自分でも検証してみてください。なお、前回の「私はどこにあるのか」という問題に対するひとつの答えは、精神を立てれば、一応解決します。肉体とは別に精神とか魂があるとすれば、肉体の範囲で答える必要がないのです。これを心身二元論と言います（ヨーロッパの思想ではこちらの方が主流です）。肉体が死んでも靈魂が残って、生まれ変わるという考えは、これにもとづきます。最後の 21 グラム説は、少しまゆつばという気がします。

三千大千世界の三千ってどういう意味？

千の三乗という意味です。ひとつの「大千世界」には小世界が千の三乗個入っています。先週の授業のインドの宇宙論は、きわめて幾何学的、数学的、規則的であることが、ポイントです。細かい構造や数字にはそれほどこだわらなくてもいいでしょう（わかれば、納得できますし、なかなかおもしろい世界です）。

一見、蓮で無限の世界を表すなんて、変できわめて宗教的だと現代では思いがちだけれど、科学の

力をもってしても、宇宙は解明されておらず、謎だらけで、まして、私は自分の目で宇宙の様子を見たわけではないので、そういう意味で、今も昔もたいして変わらないのだと思った。

インドの宇宙観は荒唐無稽なものですが、どんな宇宙観も、それを生み出した人々の世界のとらえ方を示すものとして重要です。現代の宇宙のイメージも同様でしょう。「自分の目で見たわけではない」ことに気づくことも大切です。それは学問一般に通じることで、あたりまえとか、常識と思われることでも、自分の頭でもう一度考え直すと、違った見方が可能になることがしばしばあります。

「私」の境界をあらためて考えてみると、よく分からなくなった。たとえば、身体の一部がつながった奇形児の双子を考えてみる。二人の身体はつながっているわけだから、身体を「私」の境界とすることはむずかしい。また、二重人格の人を考えてみる。たしかにことは言えないけれど、「私」ともうひとつの人格はあきらかに違うと思う。だから「私」の境界というのは、「人格」なのだろうかと思った。

取り上げているのは、肉体を自己の境界とすることへの疑問として、わかりやすい例ですね。人格という言葉も定義がむずかしいです。結局、「私」ということと同じような気もします。自己認識とか、自己等覚という言葉もあります。私が確固としたものではないことは、「我を忘れる」とか「自分が信じられない」とか、いろいろな表現があることから分かりますし、お酒とかドラッグとか、あるいは事故や病気による脳の損傷で、私というものは、とても簡単に失われるものでもあります。「私」というものが意識できるのは、自然界の奇跡のようなものかもしれません。ミミズやゴキブリには、おそらく「私」という意識はないでしょう。イヌやネコでもあぶないかも。せいぜい、チンパンジーぐらいからかもしれません（このあたりのことは生物学や心理学にくわしい人はご存じでしょう）。

天が住んでいるから「天」というのには驚いた。

「私」というものがどこまでなのかということですが、脳が脳だけで、自分というものを考えることができるなら、脳を「私」として見なせるのだろうか。哲学のようだった。神は死なないものだと思っていたが、しっかり死んで生き返る輪廻を回るのは意外だった。三千大千世界ってお経の中にありませんでしたか。

そうです。先週の授業の内容は哲学です（宗教学と哲学はとても近い関係にあります）。神については、同様な疑問が質問によくあります。キリスト教やイスラム教の神であれば、永遠不滅ですが、インドの仏教徒にとって、神（天）もわれわれと同じ輪廻の世界にいます。そのため、死ねば別の世界か、あるいはまた天として生まれ変わります。ただし、インドでも、このような神とは別のレベルの、絶対的で唯一の存在としての神を立てることもしばしばあります。ヒンドゥー教のシヴァやヴィシュヌなどがそれです。仏教でも、これから紹介する法身としての大日如来などは、人格神に限りなく近いでしょう。マンダラを中心にいるのも、このような最高存在としての仏です。「三千大千世界」は大乗仏教の経典にしばしば登場します。『法華経』もそうですが、説法や仏の活動の舞台として、全宇宙が現れます。それを指す言葉です。

世界の滅と再生に仏は関わっているのでしょうか。また、世界が滅ぶときに、その世界に存在する生物はどうなるのでしょうか。

関わっていると、関わっていないとも言えます。世界（宇宙）はそれ自体がサイクルを持っているので、仏がとくに働きかけをしなくても、滅んだり、生じたりします（生き物のようですが、これが今回の授業のポイントにもなります）。しかし、このようなサイクル自体が、仏の定めたものとか、仏のあらわれとして理解されることもあります。その場合、仏が関わってきます。あるいは世界が仏そのものになります。世界が滅ぶときには、その世界の生物はすべて死滅するでしょう。でも、四禅から上は滅びないので、一部の天は生き延びます。また、仏はこのような流転する世界からは

超越しているので、世界の滅亡の影響を受けることはありません。

人間の百年が天ではたった一日となってしまうなんて。自分は天から見れば一日たたないで死んでしまうような、ちっぽけな存在だなあと考えた。でも、仏が人間と同じような寿命や、人間以下の寿命だったら、尊崇する価値があるかどうかとも疑問です。

仏は輪廻から超越しているので、生まれるとか死ぬとか、生じるとか滅するとかはありません（仏教の立場からは）。天を上昇すればするほど、時間がゆっくりと流れるというのは、何となく、現代人でも理解できるような気がします。われわれの生命の長さにくらべ、星や宇宙の寿命などは、まったく異なるスパンで測られるようなものでしょう。逆に、人間から見れば、小さな生き物や微生物の寿命は、やはり同じように、信じられないほど短いです。『ゾウの時間・ネズミの時間』（中公新書）という生物学の本がありますが、それによると、寿命は絶対的な長さでくらべると異なるが、心臓の鼓動の数からくらべると、生物のちがいにかわらず、ほぼ一定だそうです。寿命の短い生物でも、その長さは、寿命の長い生物と同じように感じられるのかもしれませんが。この論理でいえば、われわれの生命も、星の寿命も、モノサシが違うだけで、同じようなものになります（ほんとうかどうかは知りません）

お経の訳をはじめて読んだ。今までの経験から、お経は聞いていても内容がわからないし、漢字が並んでいて、堅苦しいものだと思っていた。でも、訳を読んだら、ストーリー性があって、驚いた。単純なことでも、同じような言葉を言い換えたりすることで、むずかしく感じさせているのだと思った。

お経についての概念が変わったようで、よかったです。実際、お経には想像もつかないほど多くの種類や数がありますし、その内容もとても豊かです。ある仏教学者が書いていますが、われわれの行動や思考で、お経に書かれていないものはないそうです。お経の現代語への翻訳はたくさん出ています。たとえば、中央公論社から「大乘仏典」というシリーズが出ていて、簡単に手に入ります。岩波文庫にも重要な経典の翻訳が多く含まれていますし、なかでも『ブッダのことば』などはロングセラーです。これは初期の経典のひとつである『スッタニパータ』の翻訳で、大乘経典にはない素朴でわかりやすいことばが並んでいます。お釈迦さんが近所のおじさん程度に感じられます。一度、手に取ってみてください。

大仏が宇宙ならば、大仏殿は何なのですか。

宇宙の家でしょうね。ちなみに、宗教学的には家も宇宙を表します。

8. 仏塔という宇宙 (2) 再生する世界

宇宙そのものが神であり、因であり、果でもあるというところがよくわからなかった。宇宙が神であるならば、釈迦は宇宙であるということになるのか。宇宙は見えるものではなく、われわれが考える宇宙は虚像でしかないのか。

すべてのものは因と果の関係で成り立っているという考えは、インドではかなり重要です。仏教の縁起説もそうです。十二因縁とも呼ばれ、われわ

れの存在を因果関係で説明します。授業で紹介した「ブラフマン（梵＝大宇宙）は、質糧因であり、動力因でもあり、果としても顕現する」というのは、仏教ではなく、ヴェーダーンタというインドの正統的な学派の見解です。すべてのものに神が存在するという「汎神論」とは異なり、世界を一元的な原理によって説明します。この原理を人格的な神とみなすと、「宇宙は神そのものである」

となり、その神を大日如来と呼べば、密教になります。「釈迦は宇宙である」と説く経典はありませんが、『法華経』などの大乘経典では、釈迦は歴史上の人物ではなく、宇宙の始まりから終わりまで永遠に存在し続ける仏であるという考え方が登場します。これを「久遠実成」（くおんじつじょう）の釈迦と言います。「宇宙は見えるものではなく、虚像でしかない」と書かれていることの根拠はよくわかりませんが、大乘仏教で「空」（くう）と呼ぶのが、それに近いかもしれません。すべてのものは存在しないという考え方は、ヴェーダーンタ学派にもこれとよく似た立場があり、世界を幻影（マーヤー）と呼んで、実在しないとみなします。くわしくは立川武蔵『はじめてのインド哲学』（講談社現代新書）を参照してください。授業のアイデアもここからいろいろ借りています。

アポトーシスの話で、身体の中のそういう何かが消滅することで、何かが形成されていくというのを、世界全体に拡大して考えると、「私」という人間も、この世界の中で消えるけれども、またその後には生まれるもの、消滅していくものがあって、その連続で世界というものが形づくられていくのかなど、自分なりに考えてみました。

私もそのように考えて、アポトーシスの例を出しました。身体の器官の形成にアポトーシスという一種の自然死が必要であるとすると、われわれ生物は、誕生したときから、というより、受精卵として発生したときから、すでに死を体験していることとなります。もうひとつ重要なこととして、生物は生物からしか生まれえないということです。これは至極あたりまえのことなのですが、われわれ生物をどんどんさかのぼっていくと、地球上の生物の誕生に至るはずですが、それがどこかはわかりません。ある日突然、物質から生命が生まれたわけではなく、その境界はあいまいです。むしろ、物質と生命とを明確に分けること自体がまちがっているのかもしれない。宇宙をひとつのまとまりと考え、その存在に気づき、われわれ自身もその一部であることをたしかに感じることを、

多くの宗教が説いています。そして、そこから魂や生命は永遠であるということを主張する宗教も多く見られます。これは正しいとか正しくないとかという問題ではなく、人間の思考パターンとして、普遍的なのでしょう。

宇宙というのは因でもあり、果でもあるというのはなるほどと思った。けど、宇宙は広がり続けていると聞くが、広がるというのは宇宙の外にもある空間があって、その空間こそが因でもあって、果でもあるのではないかと思った。

私は現代の宇宙論についてはよくわかりませんが、広がり続ける宇宙の外には、われわれが存在するような空間は想定されていないのではないのでしょうか。時間も同様だと思います。インドの思想の場合、宇宙の外には神の存在は立てず、宇宙そのものを神やブラフマンという原理と見なす方が一般的でした。

宇宙が卵という考えは、他の講義でも習いましたが、おもしろい考えだと思いました。現在も宇宙は膨張し続けているらしいですが、卵が成長していくのと同じような気がします。成長し終わったら、宇宙の卵はどうなるんでしょうね。

どうなるんでしょうね。宇宙の場合、成長という考えがおそらく当てはまらず、つねに変化し続け、そこに死や再生を人間が認めているだけという気がします。「宇宙は卵である」というのは、仏塔のシンボリズムを理解するのでよく用いるのですが、別に卵ではなくても、生命体とか、生命そのものとかでもいいと思います。ちなみに手塚治虫はそれを「火の鳥」にしました。

自分も「蓮」と聞くと、『蜘蛛の糸』の仏様を連想します。天国にある池が地獄につながっているというのは、どうしてだろうかと思った。天国と地獄は紙一重なのだろうか。それとも、ただ釈迦が地獄を観察できるからだろうか。自分は天国と地獄はあまり大差のないところではないかと思っています。

『蜘蛛の糸』はみんな一度は読んでいる話なので、

知っていると思って、例の文章を書くときに話の枕に使いましたが、私はあまり好きではありません。だいたい、蜘蛛の糸のような頼りないもので救うということ自体、釈迦がカンタカを試そうとしているようで、いやですね。誰だって、自分の下から登ってくるのがいたら、独り占めしようとするでしょう。芥川はこのような人間の哀しや卑小さを、露骨に示すのが得意です。そこには突き放したような冷たさしかなく、救いがありません。それはともかく、天国（この場合は極楽）と地獄の距離は、インドではかなり離れています。それに対し、日本ではイメージの上でも地獄と極楽は急接近します。六道絵や地獄絵などの絵画作品でそれは確認できます。これについては、最近、私もまとまった文章を書きました。活字になったら紹介しましょう。

「水は努力した」とか「水は苦行した」とかありますが、水は生きていますと考えられていたのですか。

そのとおりです。インドでは水は生きています。とくに神話的な世界の水や、天上世界にある水は、生命ある水としてとらえられています。これは言葉からも言えることで、インドの言葉を含むインド・ヨーロッパ語族の言語には、水を表す語に二系統あり、ひとつが生命ある水で、もうひとつが物質として水です。ラテン語で水を「アクア」というのはよく知られていますが（アクアラングやアクエリアスはその派生語）、この語も「命ある水」の系統です。水と同様、火にも生命ある火と物質としての火の二種がありました。ちなみに英語の fire は物質としての火の系統です。

女性は水である。インド人の考えは共感できます。水は生命を生み出す。故に子供を産める女性は水であるという価値観、生命の連鎖を感じます。
私もそう思います。ちなみに、生物学的には女性の方が自然というか、よくできているそうです。もともと、生物というのは種の保存が最も重要な役割なので、実際に次世代の生命を生み出す女性の方が、男性よりもしっかりと作られています。

オスよりもメスの方が大きい生物もたくさんいますし、メスの方が長寿です。人間も含め、オスとメスがいる場合、メスとして発生したものを、成長の過程でむりやりオスとして変えてしまうそうです。オスというのは、有性生殖をするために生み出された「不自然な存在」なのです。

インドの龍は人をイメージして作られたこともあって、今まで思っていた龍とは全然違って驚いた。宇宙はあらためてとても広く、多くの仏が存在すると思った。仏塔は宇宙であるという考えには、とても驚いた。不思議だと思った。

龍のイメージはインドと中国・日本では大きく異なります。インドにも全身が蛇のような龍もいたようですが、少なくとも仏教美術に現れる龍（ナーガ）は、人の形をして、頭の後ろに蛇をたくさんつけている姿をしています。どこで龍の形が変わったかは、私もよくわかりません。龍は東南アジアにもいますし、チベットなどのヒマラヤ地域にもいます（もちろん実在ということではなく、神話的存在として）。宇宙に多くの仏が存在するというのは、なかなか理解しづらいのですが、大乘仏教や密教の仏陀観や世界観の前提となっています。とりあえず、そのようにイメージしてみてください。

この授業を受けている生徒の多くが理系だなんてはじめて知りました。私も文学部への転学部を考えているのですが、何が理系学部から、インド美術への転換へとむかさせたのでしょうか。ストウパーの形が、水の中に浮かぶ卵のイメージというのはおもしろいですね。当時の人々は、胎児が羊水の中につかっているということを知っていなかったかもしれません。

もちろん、ほとんどが理系の方というわけではありません。どの学部にもまんべんなくまがっています。割合としては、文系学部よりも理系学部の人が多いということです。私としては、文系でも理系でもかまいません。むしろ、理系の方は、専門に進めばこのような内容の授業はほとんどないと思いますので、ぜひこの機会に、このような

世界があることも知っておいてほしいと思います。常識にとらわれず、柔軟な思考をすることは、どんな分野でも重要です。文系の方は、文学部以外でも、私の授業は選択の科目や教職の科目になっています。私自身は一応文学部の教員なので、文系なのですが、数学や生物学は好きですし、着想のヒントとなります。また、どんな分野でもそうですが、論文を書くときには論理的な思考や表現が求められます。文学部だからといって、論文がエッセイや感想文というわけにはいかないのです。

なお、転学部は学生に認められた権利ですので、条件さえ満たせば、どうぞ利用してください。文学部でも歓迎します。詳しくは所属学部の学務係に聞いてみてください。最後の、羊水については、もちろん、当時の人たちだって、羊水の存在は知っていたでしょう。出産するときには破水しますし、流産や、場合によっては妊娠中の事故や病気などからも、胎児が母親の胎内でどのような状態にあるのかは、わかるでしょう。

9. 天界の模式図マンダラ(1) マンダラとは何か

マンダラは立体だったんですね。はじめて知りました。チベットのマンダラ作りは何ヶ月もかけて行われると聞きました。中心の仏に向かってまわりの仏が足を向けているのは、人間が地球の中心に足を向けている姿を連想させました。引力みたいですね。

マンダラは「仏の世界」なのですが、実際は宮殿という家を基本としているので、立体としてみると、その構造がよくわかります。絵画というのは立体を平面にするので、さまざまな描き方があるのですが、前回の授業で紹介したように、われわれはそれを一点透視法という遠近法で描く習慣が身に付いています。そのため、マンダラのような複数の視点から描いた絵は、なかなか立体に見えませんが、家の設計図のようなものと思えば、そのようにも見えてきます。チベットのマンダラについては、今回少しふれます。中心に足を向けているのは、まさに引力があるからですが、それは地球の引力というより、中心の仏から出ている引力みたいなものです。

複合の視点と聞いて、すぐにピカソの絵が浮かびました。子供の絵と似た表現法だと習ったことがあるのですが、全体をとらえ、本質を表すには、視点がどこに置かれるかが大きく関係するのかなと思いました。

複合的な視点でピカソを連想されたのは、なかなかいい勘です。20世紀絵画の大きな流れのひとつにキュビズムがありますが、ピカソをはじめとするキュビズムの画家たちは、このような複数の視点からの絵をしばしば描いています。子供の絵と似ているということも、授業の趣旨ともよく合致していますが、アフリカなどの民族美術との関連もあるでしょう。ピカソの絵にアフリカの仮面が出てくるのは、先週の「アヴィニョンの娘たち」以外にもたくさんあります。ピカソの場合、はじめは写実的な絵を描いていたことも重要です。美術の教師だったピカソの父親が、幼いときのピカソの絵を見て、そのあまりの上手さから、自分では絵を描くのをやめてしまったという有名なエピソードもあります。伝統的な絵が描けるにもかかわらず、あえて稚拙とも見えるこのような表現をとるところに、絵とは客観的な世界ではなく、画家の内面を視覚化した、きわめて主観的な表現であることがよくわかります。

子供の絵を例にした説明わかりやすかったです。決して稚拙なものではなく、頭の中でしか描けない、多くの情報を表す手段が、子供のような絵の描き方だったのだと思いました。ところで、金剛界と胎蔵界はどう違うのですか。

子供の絵については、上記の質問の通りです。金

剛界と胎藏界については、教科書のコラムでも取り上げているので、お読み下さい。簡単に言えば、金剛界マンダラは『金剛頂経』、胎藏マンダラは『大日経』というそれぞれ異なる経典を典拠にしています。基本的に、マンダラは特定の経典に説かれていて、密教の時代に出現したほとんどの経典は、それぞれ独自のマンダラを説いています。日本に伝わったのは、そのうちの一部で、とくに大日如来を中尊とするこの二つのマンダラが重要と見なされました。金剛界は仏のグループが4つ、胎藏界は3つという違いもあります。胎藏界は大乗仏教以来の仏の世界を集大成したようなマンダラで、金剛界は、あらたに密教の仏の世界を、独自のシステムで体系化したマンダラです。このように、金剛界と胎藏の二つのマンダラは、典拠となる経典や、マンダラを構成する原理などが大きく異なるのですが、日本密教では二つでひとつとして扱われるようになりました。これは、何十、何百というマンダラがあるインドやチベットでは見られなかったことなのですが、日本密教では最も重要なマンダラのとらえ方となります（両部不二といいます）。その起源は、空海が密教を学んだ唐代の中国密教にあるといわれています。

マンダラの四方に門があり、中心に円があったので、まるで仏塔のように思えるが、関係はあるのですか。

もちろんあります。仏塔もマンダラも仏の世界を表すものです。それだからこそ、マンダラを取り上げる前に、仏塔、そして仏教の宇宙観を説明したのです。構造だけではなく、マンダラの装飾モチーフと、仏塔（ストゥーパ）のまわりの浮彫にも、さまざまな共通点があります。今回の最後か、来週の初めに、マンダラを中心としたまとめを予定しているので、そこでも両者の関係を確認して下さい。

結界で外から何も入ってこなくしていたといったが、外から何が入ってくると考えられていたのか、疑問に思った。

マンダラが世界（宇宙）を表しているのですから、

その外から何かが入ってくるというのは、たしかに矛盾しているようです。しかし、マンダラは同時に儀礼のための空間で、結界は儀礼を行うためにも行われます。儀礼の場に侵入して、儀礼を妨げたりする存在を、当時の密教徒たちは非常におそれていたようです。妨害するものとして、魑魅魍魎のたぐいやヒンドゥー教の神々のような異教の神が想定されています。しかし、これは一方的な見方で、むしろ、儀礼の場という特別な空間を作り出すために、それ以外の空間との緊張関係を生み出すことが最も有効だったのでしょうか。これはちょうど、自分の国を意識させるときに、周辺諸国の軍事的脅威を強調するのに似ています。軍備を増強したり、愛国心を植え付けようとするとき、仮想敵国を作るのは、その最も手っ取り早い方法です。

マンダラの描き方は、キュビズムや源氏物語絵巻の吹抜屋台と通じるところがあると感じた。古代、中世の人々はわれわれと同じ視覚機能は持っていたが、見えている風景、見え方は異なっていたということを知ったことが本当なのかと思った。

キュビズムについては、ピカソを例にしていることからわかるように、その通りです。絵巻物の吹抜屋台も、たしかにマンダラの説明に使えそうですね。こどもの「レントゲン描法」よりもわかりやすいかもしれません。絵巻物にはそれ以外にもいろいろ特殊な技法があります。その一つに、引目鉤鼻がありますが、これもマンダラの表現方法に共通点があるかもしれません。源氏物語絵巻などでは、ほとんどの登場人物が同じような顔をしていて、その特徴からこのように呼ばれます。その理由として、高貴な人物を描くときには写実的にしないというものもありますが、それとともに、読者が感情移入をするときに、典型的な表現にしておいた方が、想像力を発揮できるということもあります。マンダラのほとけたちも、画一化されることで、多くが同じような特徴を持ちます。シンボルのみを変更して、仏のイメージを生み出したことはすでに説明したとおりです。仏を儀礼や瞑想の中で自由に操るためには、このような個

性を排除したイメージの方が便利だったと思われ
ますが、それは絵巻を読む人と似ているのかもしれ
ません。

以前に奈良の当麻寺について調べたことがある。
当麻寺にもマンダラがあり、そのときに少しマン
ダラについても調べてみた。しかし、そのときは
漠然としたイメージしかつかめず、結局、マンダ
ラがどういうものであるかわからなかった。今回、
改めてマンダラを見てみても、やっぱりよくわか
らない。マンダラを理解するのは難しいと思った。
私も小さい頃に、視点の複合平面や「綱引き」
「バス」などの、今では描くことすら思いつかな
いような絵を描いた覚えがある。マンダラを見て
いると、もう忘れてしまったこのような複数の視
点からの見方を思い出せる気がする。

当麻寺のマンダラは「当麻曼荼羅」と言います。
これは、授業で説明している密教のマンダラとは
異なる原理でできています。当麻曼荼羅は複雑な
構成をしています。中央の最も広い部分を占め
ているのは、阿弥陀の極楽浄土の景観です。これ
を浄土図と呼びます。その左右と下にはいくつか
のコマ割りがあり、浄土教の重要な経典である
『観無量寿経』の内容が、絵で表されています。
中央の極楽浄土についても、同じ経典に詳細な説
明があります。このように、特定の経典にもとづ
いて、その内容を描いた仏画のことを「経変」
(きょうへん)とか「変相図」(へんそうず)と
いいます。当麻曼荼羅は代表的な『『観無量寿
経』変相図(観経変)なのです。このような変
相図と密教のマンダラは基本的に異なるのですが、
日本では仏の集合図を何でも「曼荼羅」と呼ぶ傾
向があり、当麻曼荼羅も浄土教の曼荼羅の代表的
なものとしてされます。他にも、神道曼荼羅とか法華
曼荼羅、参詣曼荼羅など、密教とはあまり関係の
ない絵画でも曼荼羅とされるものが多くあります。
マンダラはたしかに難しいのですが、今回の授業
で、少しわかっただけだと思います。また、
授業で説明している密教のマンダラ、とくにイン
ドのマンダラについては、私の別の著書『マンダ
ラの密教儀礼』も参照して下さい。たぶん、授業

の内容がさらによく理解できるはずですが。当麻曼
荼羅についても、近々『仏のイメージを読む』と
いう本を出版する予定で、その中で詳しく説明し
ています。本屋で見かけたら、手に取ってみてく
ださい。ついでに、レジに持って行って買ってく
れるとなおいいです。子どもの時に描いた絵を思
い出したりするのは、なかなかよい経験だと思
います。しばしば、芸術家や作家などの創造的な仕
事をする人に、子どもの時の記憶を鮮明に持って
いる人がいます。おそらく、子どもの発想という
のは大人には失われたもので、創造性に満ちたも
のなのでしょう。

ジブリのアニメ映画「平成狸合戦ぽんぽこ」に、
仏を狸と狐に置き換えたマンダラのようなもの
が出てきていましたが、今回見たような実際のマン
ダラと違い、全部のものが同じ方向を見ていたた
め、放射状に仏が並ぶ本物のマンダラは、どこか
異様に見えました。しかし、つなぎの絵とバス
の絵を見て、ああなるほどと思いました。この授
業より前に、専門の授業で、子どもの発育にとも
なう描画の変化が、テーマにされていたからです。
いっぺんにすべての情報を描いてしまおうとする
試みは、必要な情報を取捨選択し切れていない子
どもの絵と同じなんだろうということが、すん
なり理解できました。

狸や狐のような動物が仏像の姿をするのは、昔話
でもよく出てきますが、有名な「鳥獣人物戯画」
にもあります。この絵巻物で紹介されることが多
いのは、カエルとウサギが相撲を取っているところ
ですが、その少し先に、カエルが仏像のように
坐っていて、その前で、お坊さんの姿をしたサル
が、読経している場面があります。宮崎駿はこの
ような絵巻物に関する知識も、たぶん持っている
のでしょう。日本のマンダラは、すべての仏が同
じ方向を向いているのが普通です。チベットのマン
ダラを宮崎駿が知っていたかどうかはわかりま
せんが、日本的なマンダラの表現になったので
しょう。なお、私は「平成狸合戦ぽんぽこ」を見
ていないので、機会があれば、確認してみます。
専門の授業で子どもの絵の発達をすでに学習して

いらっしやっただとは好都合です。ほかにもマンダラで使えそうな特徴や技法があれば教えてください

い。レントゲン描法や展開描法も、以前に教育大学の学生の方から教えてもらいました。

10. 天界の模式図マンダラ (2) マンダラと儀礼

マンダラを使った儀式とは、マンダラを三次元に再現することのように思えました。とくに、即位の際に王なる仏が、つぎの代に受け継がれるという儀式は、そのように思いました。頭に注ぐ海水、すなわち塩水は羊水のようですし、その目に新たな光を与える儀式は、仏として再び「生まれる」行為を表しているようでした。

いずれのコメントもそのとおりでと思います。マンダラを前にした弟子や阿闍梨にとって、マンダラは立体的なイメージを持って出現したのでしょう。当時の文献によれば、マンダラは砂マンダラのように平面的に作ってもいいのですが、彫像などを使って立体的に作ってもいいそうです。その場合も、楼閣などの枠組みは平面的に表したと思いますが、仏が三次元で表現されているのは、さらにリアルだったでしょう。塩水と羊水を結びつける発想もいいですね。医学関係の先生から聞いた話ですが、人間の血液には塩分が含まれていますが、その濃度は地球に生物が誕生したときの「原始の海」の海水の塩分の濃度と、ほぼ同じだそうです。当時の生物は、きわめて単純な構造をしていたでしょうが、体内の水分と、外界の海水が直結していて、生物がどんどん進化していても、その濃度のままで維持されたということだそうです。人間はその体の中に、生命が誕生したときの海をたたえているのです。

仏教は自分も神様になろうとする宗教だったんですね。仏にもいろいろあるけど、やっぱりなるのは根元仏なんですか。それだと仏がどんどん増えてしまうのではないかなと思いましたが、一体化するなら、そういう問題も起きないかなと思いました。仏教が自分も「仏」になる宗教であるのは、キリ

スト教などから見るとおかしいかもしれませんが、そうなのです。釈迦はキリスト教的な神ではないのです。われわれに悟りに至る道筋を示し、それをたどることで、われわれも悟りを開く、すなわち成仏できるのです。釈迦以前にも多くの仏たちが出現したと、早くから考えられてきました。ただし、仏教の歴史の中では、仏は次第に絶対化していきます。たとえば、浄土教では阿弥陀が中心となった仏の世界が登場しますが、われわれは自らの努力で仏になるのではなく、阿弥陀の慈悲によって救済されるだけです。密教ではそのような仏の絶対化とともに、その仏との同体化も求められます。その場合の仏は法身であり（つまり根元仏）、宇宙全体となります。ですから、ご指摘通り、仏がどんどん増えることはありません。

今日の講義でマンダラの道具としての役割がわかった。マンダラを作ることは仏の世界としてコスモスを地上に再現することであり、そのマンダラを見て、菩薩や弟子が仏や阿闍梨となったことを自覚するというのは「なるほど！」と思った。マンダラの仏が中心の仏に足を向けているのも納得できた。

「なるほど！」と思ってもらえてよかったです。これまで知らなかったことにふれて、その上で納得できるというのは、なかなかの快感だと思いますが、いかがですか。

最後の方で、マンダラを壊すと言っていたところの説明を聞き逃してしまった。なぜ壊して砂を川に流すのですか。儀礼の一部なんですか。

マンダラを壊すことの説明は、ほとんどしていませんが、インドの儀礼を考える上で重要なことです。インドの儀礼空間の多くは、宇宙をかたどっ

ています。マンダラもそのひとつです。そのため、儀礼の準備段階で、儀礼の場を作る、すなわち宇宙の創造を行います。この宇宙は儀礼の場に仮に出現しただけのものですから、儀礼が終われば不要ですし、むしろ、そのような聖なる空間が日常的に存在するのは、好ましいことではありません。何度も使えばいいのではと思うかもしれませんが、宇宙を創造すること自体が儀礼なのですから、すでに宇宙が存在してはまずいのです。マンダラの砂を川に流すのは、川にすむナーガへの布施と言われます。古い時代から、ナーガは釈迦の聖遺物のようなものを守る役割を果たしているのです、その関係で登場するのではないかと思います。

マンダラにしても仏塔にしても、宇宙につながっているが、宇宙というのはつまり真理といえる存在なのだろうかと思う。

そうです。仏教では真理を「法」といい、その法が仏そのものであるという考えから法身が登場します。古代よりインドの思想では、宇宙を支配する法則や原理のようなものが重要と考えられてきました。ウパニシャッド哲学の「ブラフマン」（梵）はその代表です。

敷曼荼羅はどこに敷くのですか。仏を描いたものの上に、何かを置くのはいいのですか。

敷曼荼羅は灌頂を行う儀礼の部屋の床の上に敷きます。それを前にして、弟子は灌頂を受けるのです。じゅうたんのようなイメージですが、その上に人が乗ったり、何かものを乗せたりはしません。これはチベットの砂マンダラも同様で、何かを乗せたら崩れてしまいます。砂マンダラを作る作法のことを「七日作壇法」といって、一週間かけて作る方法が日本にも伝えられてはいるのですが、実際は行われなかったようで、敷曼荼羅を床に広げて、あっという間にマンダラが出現という方法がとられました。これは今でもそうです。

水は智慧のシンボルだと聞いて、智慧のシンボルはたくさんあるなあと考えた。たとえばリング。アダムとイヴの話で、ヘビからもらう禁断の果実

は智慧の象徴。先生が使っている iMac も智慧のシンボルのリングを使っています。キリスト教も十字を聖なる象徴にするし、タロットが略化されたトランプのマークも、智慧や富のシンボルだった。そう考えると、人間の思想や、宗教を簡単に表すものとして、マンダラや仏塔を含めた「シンボル」は、重要な役割を担っていると思った。

智慧とシンボルについて、いろいろ書いて下さいました。そのとおりですね。シンボルについての研究はかなり人気があって、宗教学や美術史でもよく取り上げられます。世界中のシンボル辞典のようなものも何種類か出ています。密教は仏教の中でもとくにシンボルを重視します。授業で紹介している仏を表すシンボルの他にも、手で特別な形を作る印や、象徴的なことばであるマントラも、一種の象徴です。このようなシンボルは、宗教の実践において重要な役割を果たします。ストレートに意味を伝えたり、見るものに強烈なイメージを与えたりするからです。

水が智慧のイメージを持つところがおもしろいとおもった。生きる上でもっとも必要なもので、また体にしみこむように浸透する水という存在は、身近だけどどこか神秘的なものだと思う。

以前に取り上げたストゥーパで、周囲に水があることもこれにつながります。水は生命を誕生させる源であり、灌頂とは再生の儀式でもあるからです。

灌頂は頭に水を注ぐということを知って、キリスト教における洗礼と方法が酷似していると思った。儀式の意図は異なるけれど、水は重要な位置にあるのだろう。

私も洗礼と灌頂は似ていると思います。洗礼はキリスト教がはじめたのではなく、ユダヤ教徒が早くから行ってきたイニシエーションだったそうです。キリスト自身も、若いころに洗礼を受けています。洗礼を行ったのはヨハネですが、キリストの弟子にもヨハネがいるので、区別して洗礼者ヨハネといいます。なお、このヨハネが後にサロメという女性の一種のわがままで、首を切られます。

クリームトの絵やリヒャルト＝シュトラウスのオペラなどでも有名です。

自家のある町では毎年「甘茶祭り」というのがあって、仏像のようなものに甘茶をかける風習（もしかして全国的なのか）があるんですが、これも灌頂と何か関わりがあるのかと思った。関係ないけど、甘茶っておいしいですね。

これは一般には「花祭り」といって、釈迦の誕生を祝う儀式です。日本中でかなり広く分布しているはずですが。伝統的には「灌仏会」（かんぶつえ）ともいって、その場合、灌頂と名称もよく一

致します。灌仏盤という金属製のたらいのような中に、天地を指さす子どもの姿の釈迦（誕生仏といいますが）を置き、上から甘茶をかけるのが一般的な方法です。甘茶の接待もあるのがふつうですね。私も以前、甘茶を飲んだことがあります。たしかにおいしいですが、少し甘すぎたような記憶もあります。資料の文章にあるように、誕生直後の釈迦が龍王から灌水を受けたことを、灌頂のモデルとして密教ではとらえられています。灌頂そのものも仏として生まれ変わることなので、凶式としても釈迦の誕生は灌頂に一致します。

11. 仏教の仏と異教の神 (1) イメージの連鎖

シヴァとパールヴァティーの子がガネーシャというのは驚いた。象の頭の子がなぜ人の形をした親から生まれるのだろう。時間の神＝死神というのは、時が経つことで死をもたらされるから成立しているのはなるほどと思った。破壊の神であるシヴァが、なぜカーリーを破壊できないのだろうか。象頭の神ガネーシャは、もっともインドらしい神様なので、最初に紹介しました。ガネーシャはもともと単独で信仰されていたのですが、シヴァやヴィシュヌを中心に、神々の体系ができあがったときに、シヴァの子として位置づけられたのです。もちろん、ゾウの頭に付け替えたという神話も、その後の創作でしょう。シヴァとパールヴァティーとの間の子には、もう一人スカンダがいます。スカンダについては教科書の第3章で取り上げたように、本来は母神と呼ばれる女神たちと密接な関係を持っていました。中世のインドはシヴァとヴィシュヌ、そしてドゥルガーなどの女神を中心とした神々をそれぞれ最高神とする立場が、ヒンドゥー教の中に形成され、スカンダやガネーシャもそれに呑み込まれていったのです。シヴァとカーリーのどちらが破壊の神として強力であるかは、それぞれの立場によります。シヴァ派の人々はカーリーよりもパールヴァティーをシヴァの妻と見

なしています。カーリーがシヴァよりも強いという考えは、カーリーを最高神とする人々が有するものです。

「創造があるから破壊ある」を、「始まりがあるから終わりがある」ととらえると仏教には永遠がないように見える。仏教にはずっと続くという考えはないのですか？ 今回のスライドはほんとうにつながりがあるのがわかっておもしろかったです。「創造があるから破戒がある」は、「始まりがあるから終わりがある」とは少し違うような気がします。インドでは基本的に時間は円環をなしていて、世界の終末の後にはふたたび世界は蘇り、永遠に存在し続けるという考えの方が一般的です。仏教はむしろ、時間の存在も絶対的なものとは考えず、「一切は空（くう）」というラディカルな立場を取ります。その意味で「仏教にはずっと続く」という考えはたしかにないのですが、それはそもそも時間も存在しないという意味でそうなのです。スライドはあまりゆっくりお見せできませんでしたが、配付資料でつながりを確認してみてください。希望者にはパワーポイントのファイルも配布しています。

俯瞰図を見たとき、今まで紹介されてきたさまざまな事物が最終的にマンダラに向かっていることがわかったとき、マンダラというのは密教美術における「地図」のようなものだと感じた。あとシヴァとカーリーの絵は、見ていてとてもおもしろかった。

「マンダラが密教美術の地図」というのは、わかりやすい表現ですね。授業をまとめた図は、中心にマンダラをおいていましたが、これは授業の流れに沿って、最後にとりあげたマンダラをひとつのゴールにしたからです。べつに他のテーマ、たとえば「聖なるものの表現」とか、「生命体としての宇宙」などでもまとめることができます。皆さん自身も、それぞれの理解で俯瞰図を作ってみるといいでしょう。ものごとは、さまざまな角度から見ることができ、その都度、異なる様相を見せるはずですよ。

シヴァに多くの妻がいるのは、ギリシャ神話のゼウスと似ているが、ヒンドゥー教とギリシャ神話に関係があるのか。

関係があります。ゼウスに似ているのはシヴァよりもインドラ（帝釈天）です。シヴァの前身とされるヴェーダの神ルドラも、彼らと関係があるかもしれません。インドとギリシャの神話はさまざまな類似点があります。それは、いずれもインド＝ヨーロッパ語族が伝えた神話で、共通の起源があるからです。さらに、「アヴェスタ」などに含まれるイランの神話や、北欧の神話なども、同系列に属するので、共通のモチーフや、よく似た性格の神が現れます。このような神話研究は、比較言語学の発展とともに現れ、かつてはさかんに行われていました。フランスのデュメジルやアメリカのエリアーデ、日本でも吉田敦彦氏などが多くの研究を発表しています。しかし、最近はあまりはやっていないようですね。

シヴァやマヒシャースラマルディニーは殺戮の神なのに、どちらも笑顔で描かれているのが少し怖かった。シヴァとパールヴァティーの絵で笑顔なのはわかるが、マヒシャースラマルディニーは殺

してるシーンなのに、すごい笑顔。やっぱり笑顔の方が美人がはえるからだろうか。でも、やっぱり全体を見ると殺戮を楽しむ異常者（神？）にしか見えない。

にっこり笑って人を殺すというところが、たしかに怖いですね。マヒシャースラマルディニーの場合、もともになっている神話でも、この女神がほほえみを浮かべながら、容赦なく敵を殺戮するという描写が随所に見られます。一方のシヴァは、笑顔ばかりではなく、威嚇的であったり、忿怒をみなぎらせた表情で描かれる場合もあります。画家や彫刻家にとって、怒りに満ちた恐ろしい姿を表現する方が、笑った顔よりもむずかしいのではないかと思います。過度にそれを表現すると、怖さよりも滑稽さの方が前面に出てくるからです。

教科書の第5章に出てきた「青頸観音」として紹介されたシヴァと、今日の講義で出てきた破壊神のシヴァとは同一のものなのかどうかを疑問に思いました。

同一です。シヴァの神話の中で、世界創造の時に生じた毒を飲み、のどが青くなったというものがあるのです。しかし、教科書にも書いたように、青頸観音がなぜこのシヴァと関係があるのかはよくわかりません。

シヴァは色も青く、蛇がからだじゅうにいること、生首の首飾りなど気持ち悪いと思った。そして、シヴァはどうしてたくさん奥さんがいるんだろうと思った。黒色で、死はイメージできるが、時間はなかなかイメージできないし、女の人なのに死神なのは意外だった。

シヴァはヒンドゥー教の神々の中では、異色の存在で、その起源も複雑です。身体の色が青黒いというのは、インド土着の神のイメージがあるからでしょう。クリシュナという神も同様に、身体の色が黒い特徴があります。カーリーは正確には死神ではなく、「死をもたらず神」というのが適切でしょう（同じこと？）。インドの死神はカーリーとよく似た名前のカーラで、これについては、以前に配布した「インドの宗教における死のイメ

ージ」の中で紹介しています。

降三世明王が人を踏んでいたり、ヤマーントカが牛を踏んでいるのは、上に乗っているものを強く表すためですか。

仏教側からはそうなのですが、インドのイメージの伝統では必ずしも優位を表すわけではありません。これについては今回取り上げます。

ヒンドゥー教の神々は家族を構成すると聞いて、ヒンドゥー教とは家族を大切にすることかなと思った。仏教には家族という概念があまり出てこなかったが、仏教には家族を敬う考えがあるのでしょうか。

仏教は基本的に出家主義なので、家族を構成することには重きをおいていません。家族を大切にすると敬うというのは、世俗的な倫理や気持ちなので、別に否定はしませんが、仏教の教えとして重要というわけではないでしょう。仏教の仏たち、とくに種類や数が増えた密教の仏たちは、いくつかのグループに分かれます。たとえば、観音を中心としたグループ、金剛手を中心とした「力の仏」のグループなどです。これらのグループは「部族」と呼ばれます。家族よりも範囲の広い、同族とか、一族郎党といったニュアンスの言葉です。密教の仏の世界は、仏、菩薩、女尊、明王などの階層とともに、これらの部族によってもまとめられます。ちょうど、縦軸と横軸のような関係です。

死神の話をされていたときは、資料のインドの宗教に見られる死生観、ヴァルナの話は 2 章、降三世明王とシヴァは 7 章…と、書いてけばきりがないうほど、教科書とリンクしていて、なるほどなとニヤリとしました。もう今回が教科書の総集編のような感じがします。

教科書や配付資料をよく読んでくれているようで、うれしいです。授業は教科書に沿っては進めませんでした。予備知識として教科書の内容を把握していると、授業がよりよく理解できるでしょう。

授業のはじめで今までのまとめをしたが、すべての中心にマンダラが据えられていた。しかし、その重要なはずのマンダラがまだよく理解できていない。マンダラって何なんですか。

そのように思う人も多いでしょう。とりあえず、配付資料の新聞の切り抜きのところをもう一度読んでください。くわしくは私の『マンダラの密教儀礼』に書いてあります。

仏教美術がヒンドゥー教の神のイメージに影響を与えたり、逆に仏教がヒンドゥー教の神を借りてきたりと、時代の流れでそれぞれの宗教の優位が入り替わりが起きているのだと思いました。昔、栄えていた神でも、現在のインドではほとんど忘れ去られているような神がいるのではないかと予想できます。

インドの宗教の魅力のひとつに、神々の壮大な世界があります。神話や図像、儀礼など、さまざまな要素がそこから生まれてきます。歴史の中で姿を消してしまった神も無数にあったはず。中世インドでは、インド各地で信仰されてきたさまざまな神が、シヴァやヴィシュヌなどの特定の有力の神に統合されていきました。そのときに、名称やイメージが変えられてしまった神もたくさんいました。なお、このような文化統合を、インドの社会の特質ととらえて、「大伝等と小伝統」という概念が提唱されています。

一番最後に、仏教の神々はヒンドゥー教の神々にささえられているという話がありましたが、それを聞いて、ヒンドゥー教とはほんとうに雑多な宗教だと思いました。授業が始まる前に先生の机の前を通り過ぎるときに、高野山大学のファイルを見つけたのですが、高野山大学ってどのようなことを勉強するのですか。

高野山大学のファイルは表に大日如来などの五仏を表す梵字や、高野山大学を表すチベット語が書いてあったりして、なかなかレアなクリアファイルです。高野山大学は私の前任校で、そこで 8 年間、研究、教育に従事していました。高野山真言宗を母体とする学校法人によって運営され、文

学部の単一学部しかない小さな大学ですが、仏教研究や密教研究ではトップクラスのスタッフを擁しています。高野山の町そのものが標高 800 メートルほどで、日本で一番標高の高い大学かもしれません。高野山は一昨年、世界遺産にも登録され

ましたが、中世の宗教都市といった感じで、とてもいい雰囲気のところですよ。金沢は「歴史と伝統の町」とよく言われますが、所詮、江戸以降の歴史しかなく、高野山からくらべれば新興の町と言った印象を私は受けました。

12. 仏教の仏と異教の神 (2) 周辺から支える神がみ

仏教の仏とヒンドゥー教の神は、たくさんの共通点があるのはなぜだろうか。今回で授業が終わるのはさみしい気がする。理系の自分にとって、このような授業がなければふれることのなかった世界なので、よい経験になったし、満足している。満足していただけて何よりです。学期のはじめのオリエンテーションのときにもお話ししましたが、おそらく受講生のほとんどのかたにとって、授業でとりあげた内容は未知のものだったと思います。半期の授業を終えて、知らない世界にふれることができよかったという感想を持ってもらえるのが、私自身の目標でもあります。とくに理系のかたにこそ、このような分野に興味を持ってもらえとうれしいですね。これからは文系、理系という分類はあまり意味をなさなくなるかもしれません。

ヒンドゥー教と仏教の違いがわからない。

肝心なことを説明していませんでしたね。ヒンドゥー教はインドで今も大多数の人々が信じている宗教ですが、宗教というよりも生活の規範や信条のようなものです。インドの宗教史の中では、正統的な位置にあります。仏教は紀元前 5 世紀頃に誕生して、12、13 世紀頃まで続いた宗教で、どちらかといえば異端的です。

他の宗教の神を改宗させたという表現は、仏教の大きさを強調するためにあるように感じた。

仏教から見ればそうなのですが、ヒンドゥー教としてはまったく相手にしていなかったかもしれません。

タイでは仏様が頭の上にいるので、子どもなどの頭をなでてはいけないと聞いたことがあります。今日の講義で仏を支えている人々を下にしているということを言っていました。タイではそういった考えで、頭に仏様がいるということなのですか。

たぶん、それとは関係ないと思います。タイでは仏様がいるというよりは、聖霊のようなものが宿っているという説明だったと思います。タイをはじめ、東南アジアが、インドの宗教的な伝統の影響を強く受けた地域なのはたしかですが…。

星占いっていうのは、意外に世界各国、昔からあるもので、絵の中にも書かれているのは驚いた。マンダラの外の区画に描かれている星座の神々は、インドから中国を経て伝わったもので、ヨーロッパに伝わった占星術と同じ起源を持つものです。

足の下や座に置かれているものは敵対者でないということは、説明されなければなかなかわかるものではないと思った。自分にとっては、母胎というより、殻から抜け出たように思えた。

そのイメージはよくわかります。

今までのスライドで、日本の仏像では東寺のものがけっこうあったと思います。浪人時代、東寺の近くに住んでいたの、見に行けばよかったと思いました。夏休み、京都に行くので、できたら東寺に行こうと思います。

ぜひ行ってください。京都国立博物館では「美の

かけはし」という特別展をやっています。かなり贅沢に名品を展示しています。ついでにどうぞ。

今まで仏教を中心に見てきたが、最後にヒンドゥー教のスライドを見て、ヒンドゥー教もおもしろそうだった。

ヒンドゥー教はとてもおもしろいですよ。視点を変えれば、同じものがまったく異なるように見えるのです。

インドにはさまざまな神々が存在しているが、インド以外の国で、別の宗教の神々が共存している国は、ほとんどないのではないかと思った。

そうでもないようで、日本でも神道の神と仏教の仏が共存していますし、ヨーロッパでも土着の神とキリスト教の神がいます。

仏教の神々がヒンドゥー教の神々にささえられていると聞いて、おもしろいと思った。ある意味、仏教の神々は他の神々に依存しているようなものだと感じた。

そのとおりです。前回の授業の趣旨もそこにあります。

どちらの降三世明王も大自在天と烏摩妃を踏んでいて、上下関係は共通なんだと思った。

そうです。密教美術は忠実に受け継がれています。

最後に見た神像は、仏像よりも躍動感があり、「ありがたい感じ」は仏像よりも少ない気もしたが、「親しみやすそうな感じ」は強く、神様シールとかポスターとか作っちゃうインドのノリの源を見たように感じた。

そのとおりです。仏教美術は「静」、ヒンドゥー教美術は「動」です。インドの美術の全体を見ると、ヒンドゥー教の美術の方がヴァラエティに富んでいて、ずっとおもしろいです。

インドのことやいろいろな像の意味が聞け、関心が深まった。

よかったです。機会があればインドにも行ってみ

てください。

仏教はどうして、他の宗教から神々のイメージを借りてまで、仏を増やしたのだろうか。

それだけ危機感があったのでしょうか。

足で踏みつけるのは敵対するものを表すことや、力の強さを表すことばかりだと思っていたけど、毘沙門天と地天のように、支え合っているものがあると知り、驚いた。

上下に位置する者たちの関係は、なかなか複雑です。

降三世明王がかっこいいと思った。敵対者でないなら、なぜ踏みつけるのか。

降三世明王を含め、五大明王はみんなかっこいいです。

最後に見たインターネットからの写真が、とてもおもしろかった。

これは私がインドで撮ってきた写真資料で、研究者はもちろん、一般の人にも閲覧可能なように公開しているものです。皆さんもぜひ見てください。順次、拡充していきます。

はじめに配られた資料の膨大な知識に、これはむずかしい講義かもなぁと戦々恐々でしたが、とてもなじみやすく、わかりやすかったです。踏みつけられているものは支えているもの、ならば外教や信者あってこそ、仏教は成り立っているのだと思う。

「なじみやすく、わかりやすい」という感想は、うれしいですね。はじめに資料を配るのは、毎回、コピーに時間を取られるのを避けるためですが、量に圧倒されるということはあまり考えていませんでした。じつは、毎年、少しずつ量を減らしていて、数年前は現在のものより 2 割ほどページ数も多かったのですが…。

マンダラに他の宗教、たとえば、ヒンドゥー教の神が動員されたことに対して、抵抗はなかったの

でしょうか。

もともと仏教は外教の神を柔軟に包摂するという性質を持った宗教でした。あまり抵抗はなかったでしょう。

マンダラで周辺部に描かれたヒンドゥー教の神々
が変化しないというのは、それだけ、仏教とのつながりが強いからということでしょうか。それだけ、切り離しがたいものだからこそ、わざわざ敵対者のように描いて区別しようとしたように感じました。

私もそのように理解しています。一種の仮想敵国を設定して、内部の結束や優位を示したかったのでしょうか。

いろいろな仏像があるのだなぁと思った。

世の中にはほんとうにたくさんの仏像があります。

踏まれていたり、周囲に置かれているものは、一見すると支配されたり、虐げられていると思うが、そうすることによって、「支えている」とかイメージの母胎を表しているというのは、非常に新鮮な考え方だと思う。

正反対のことなのに、同じイメージがそれを表しているのがおもしろいところですね。

降三世明王はシヴァ神を踏んでいるということだが、明王ってそんなに強いのだろうか。強い弱い
の問題ではないのだろうかから、一宗教の最高神を足蹴にしている様は異様だ。

基本的に明王って、そんなに強いのです。仏教徒にとってはという限定付きですが。

女神が水牛を倒すシーンが、神を変えて多く使われているので、人気があるところなのかなと思いました。

ネットで紹介した寺院のことだと思いますが、あのお寺は「アンピカー寺院」という女神を本尊とする寺院で、まわりを大勢の女神で固めています。ヒンドゥー教のお寺でもかなり特殊です。

この講義はわからない単語がかなりあるので、資料を読むだけでは理解できないことがしばしばあった。しかし、仏像やマンダラを見るとき
の解釈を、この授業で教えてもらったことにより、これからはもう少し深く仏教美術の作品が見れるようになると思う。また哲学的な部分はとてもおもしろかった。

ぜひ、さらに詳しく仏教美術を見るようにしてください。哲学の問題も、すべての学問の基本だ
と思いますので、関心を持ち続けてください。

インド密教に動物の像が多いのはなぜなのか疑問に思った。動物に何か特別な力がある
と考えていたのだろうか。

たしかに多いですね。お寺はまるで動物園のよう？

最後に先生が言ったとおり、仏像を見たときの印象は、ずいぶんと違っていた。しかし、自分では
そこまで知識を得たり、理解できたとも思えない。いったい何が変わったのだろうか。

「ずいぶん違う印象を受ける」と感じる事が大切です。これからも、知識が増えれば増えるほど、
同じものが違ったように見えます。見えないものが見えてくると感じられるはずですよ。

インド密教はさまざまな地域からの影響を受けているということを再認識した。考えてみると、
インドはアジアの中央に位置し、さまざまな民族の文化が入ってきたはずだ。ヒンドゥー教の彫刻は写実的で、女性像はきれいだ
った。

インドにくらべれば、日本はほんとうに小さい国ですし、その位置もユーラシア大陸のはずれに
しがついているようなものです（極東というくらいです）。自分の国が世界の中心にあるように感じるの
は、日本人ばかりではありませんが、相対的な位置を知ることが大切です。アンピカー寺院の女性像は、
ほんとうにきれいです。

降三世明王の下に人が踏みつけられているのは、とても刺激的であった。インターネットから取っ

てきた寺の写真は何枚か見たが、中には、壊れそうなものもあって、大丈夫なのかなと思った。

繰り返しになりますが、授業で紹介したネットの写真は私自身が撮影し、公開しているものです。はじめの方でお見せしたナヴァシャーカーという寺院の方は、たしかに半分ほどくずれています。インドではこのような石積みのお寺が、あちこちにたくさんあります。きれいに残っているものでも、かつては崩壊していて、修復したものもあります。

ヒンドゥー教の像の方が細かいところまで彫刻が施されているんだなと思った。マンダラの一番外側にいるものによって、中心の仏が存在するんだなと思った。

じつは、授業の主題の密教美術は、インド美術の中ではレベルが低いと見なされています。ヒンドゥー教美術を見ると、たしかに見劣りがするところもあります。

マンダラの中のヒンドゥー教の神々は、仏教の仏たちより、笑ったり、顔をしかめたりと、表情が豊かだと思った。最後のヒンドゥー教の寺院は、ほとんど日本の寺と違って、入る前から彫刻がびっしりと彫ってあって、ひとつの彫刻のように見える。

アンビカー寺院は小規模な寺院ですが、これが、有名なカジュラホなどに行くと、見上げるような巨大な寺院が、びっしりと彫刻で覆われています。圧巻ですよ。

ヒンドゥー教美術はきれいだったが、密教美術の方が力強く、印象強かった。

日本の密教美術の作品は迫力がありますね。

足の下に踏まれているものは、敵ではなく逆に上のものを支えているという解釈のしかたは、見た目では想像もつかないことだ。教科書で知ったこの解釈のしかたを、今日の授業では作品を見て思い出すことができうれしかった。

教科書の知識を反復できてよかったです。もう一

度教科書を読むと完璧です。

降三世明王に踏まれたという功德が得られるという話に疑問を感じた。半年、授業を受けてきて、美しいだけでなく、歴史的、神話的にも奥が深い密教美術について学ぶことができてよかったと思う。

わたしもよかったと思います。機会があれば学部の授業にもどうぞ。さらに奥が深い世界が無限に広がっています。

踏みつけているのに、時には敵対、時には仲間、おもしろいなあと思った。私は友達とけんかしたりするときや、大の仲良しだったりするときもある。それと少しにているなあと思うと同時に、踏みつけているものも、作品の一部として、大切な役割を担う重要なものだと思った。

「仲良しだからけんかをする」というのは、たしかに一種の真理ですね。降三世明王がシヴァを踏むのも、本来、両者がとても良く似た存在だからでしょう。シヴァではなくもっとおとなしい神とかを踏んでいたとしたら、落ち着かないイメージになりそうです。

足下や像に置かれるものが、まったく逆の意味になっているのに驚いた。たしかに、作品の見方が最初とは変わったと思う。

知識が増えれば、これからも変わっていくと思います。

ヒンドゥー教の神々と仏教の神々は、密接な関係があることがわかり、また多くの妻を持つゼウス、シヴァのように、ギリシャ神話とも関係があると Q&A で書いてあったことから、世界中の宗教が密接に関わっており、どんな宗教でも本質はほとんど変わらないのではないかと考えた。

「ほとんど変わらない」かどうかは断言できませんが、宗教には一種の普遍性があるのはたしかです。

今日の授業の最後の方に、寺院の写真は何点か見

せていただきましたが、寺院は仏教が衰えたときに、かなり多くが破壊されてしまったのでしょうか。

最後にお見せしたのはヒンドゥー教の寺院です。中世の仏教や密教の寺院はほとんど残っていません。信者がいなければそのお寺は崩壊するしかありません。文化は人間が支えるものなのです。

悪いイメージが強い鬼が、神を支えているシーンはとても不思議だった。敵対していないといわれてもどうもスッキリこない。

シヴァと降三世明王は敵対しています。しかし、それがインドの神のイメージとしては極端であるというのがポイントです。

邪界もじつは仏を支えているというのが、今日始めてわかった。今まで仏像のまわりはただの演出にすぎないと思っていたが、意味のあるものだったのですね。(授業全体について)新しいものの考え方や視点が学べておもしろかったです。

ぜひ、これからいろいろな「新しいものの考え方や視点」を知ったり、身につけたりしてください。

前に見たスライドで、踏みつけられていてかわいそうだと思うこともあったけれど、ほんとうは踏みつけられているんじゃないかと、上にいるものを支えたり、上のもののおもとだということがわかった。また、同じようにマンダラの外側にいる神は、連れてこられて仲間はずれの扱いをされていると思ったが、しっかりと中の者たちを支えているとわかった。

そのとおりです。違ったように見えることを体験してください。

インドで左(手、足など)が、不浄とされているのが、仏教に出てくる神々と何らかの関係があるのか疑問に思いました。

インドでは浄、不浄をきわめて厳格にとらえ、右が浄、左が不浄という観念が徹底しています。大自在天をあえて左足で踏むことに、意味があると

思います。

毘沙門天の下の2匹の鬼がなんだか素敵です。

この毘沙門天像も東寺の所蔵で、ときどき展示されています。素敵な鬼を実際に見てきてください。

柱に彫られていた像の姿がさまざまでおもしろかった。逆立ちして支えているやつなんかは、遊び心が感じられた。

柱頭のガナのことですが、たしかにおもしろいですね。そのうち、このような像ばかりを集めた授業をやってみたいと思っています。

マンダラにガネーシャなどが描かれているのがびっくりでした。ヒンドゥー教から仏教が生まれたっていうのではないと思いますが、よくよく見ると、似ている(服とか)点があるなあと思いました。はじめよりもだいぶ興味を持ってきたなあってところで授業が終わるのがさみしいです。

私もさみしいです。でも、授業は文学部でもいろいろやっていますので、機会があればぜひどうぞ。ホームページにもいろいろな情報を載せています。

これまでお寺などに行って仏像を見ると、きれいとかおごそかだという気持ちだけで見ていたけれど、この授業を受けてから、テレビなどで仏像や神様が出てくると、ああそういうえば、この神様はこんな性格だったとか、この仏像はあの神様のイメージを借りているんだなあ、より深く真剣に作品を見ることができるようになった気がしてうれしかった。この授業を終えて、あらためてお寺をめぐり、作品を眺めてみたい。

授業の内容をととても積極的に活用していただいているようで、うれしいですね。たしかに知っている仏像などがテレビや新聞に出ていると、身近な人が出ているような感じがします。ぜひいろいろな作品を実際に見るようにしてください。

神を踏みつけているのか、それとも下から支えているのか、そのちがいを判断するにはどうしたらいいですか。もし、踏みつけているのなら現代に

において宗教のちがいによる紛争が世界中で絶えないのと、同じような感覚を覚えた。

ちがいを判断するには、その仏や神についての知識を豊富に持つことでしょう。宗教のちがいによる紛争は、たしかに多く発生しているような気がします。実際は、宗教の名を借りた利権や怨念の争いです。どんな宗教も戦争をしるなんてことは説いていません（もちろんイスラム教もそうです）。怖いのは宗教なのではなく人間なのです。

今回は講義すべてを通しての感想を述べさせてもらいます。仏教の思想的、体系的な説明や、他の宗教との関連、および、宗教としての普遍性や時代による変化を、仏像という形而下的なものによって、その思想の反映を見て感じ取ることのできる講義はじつに楽しくありました。ただ、マンダラについては講義で詳しく語られたので特にはありませんが、仏像において（親しみある西洋美術かぶれなのかもしれませんが）、思想の反映や細部の技法よりも、もっと美術的に大切なもの、つまりは純粋経験としての作品のすばらしさや美しさといったような感覚が、自分にはなかったことが残念です。

じつに意欲的、能動的に授業の内容を把握してもらえてうれしいです。作品の持つ美術作品としての意義や重要性は、たしかに私の授業では十分ふれることができなかったです。これは私自身の関心にもよるのですが、作品の持つ形や美よりも、その背後の思想や意味、人々の「思い」のようなものに、惹かれるのです。美術作品としての仏像の持つ魅力は、比較的、文献がたくさんありますので、ご自身でいろいろ調べてみてください。

ガルダは乗り物だから、像はないものだと思っていた。

あります。ガルダやナンディン（シヴァの乗り物の牡牛）は、単独で作られ、寺院では本尊の前で礼拝したり、控えているように安置されます。

仏教美術だけではなく、西洋絵画や音楽においても、その作品の意味やバックグラウンドを解釈で

きたら、美術鑑賞を通じて、とても豊かな人生になるのではないかと思った。

確実にとても豊かな人生になります。何百年も人間が守ってきた古典的な芸術の世界を知ること、まったく違う世界にふれることができます。

インドの密教というのは奥が深く、この講義だけではすべて理解することのできない偉大な宗教であることを知った。

偉大かどうかは、皆さん自身で考えてみてください。

いったい、何を勉強すればよいのやら。単位落としそうです。でも、一回質問が採用されたのでよしとします。

大丈夫でしょう（保証はしませんが）。質問の採用はなかなか厳しかったですか？ひょっとしたら一回も採用されていない人もいるかもしれませんが、気にしないでください。

仏教がヒンドゥー教から発展してきたというのは、なんだか不思議な感じがした。でも、よく考えてみると、キリスト教とユダヤ教の関係もそんなものだから、宗教というのは、そういう風にできあがっていくものなんだろうなと思った。

仏教はヒンドゥー教からできたわけではありませんが（順番としては、仏教の方が先です）、密教はヒンドゥー教の影響を強く受けています。すでにこの時代、ヒンドゥー教の方が圧倒的に優勢だったからです。

なぜ、仏教の神々がヒンドゥー教の神を制圧するというような神話があるのかが疑問です。手塚治虫の「ブッダ」を読んで受けたイメージとあまりにかけ離れているので。

私は手塚治虫の「ブッダ」を読んでいないのですが、たしか釈迦自身の生涯を描いたものですね。降三世明王が現れたのは7世紀ころなので、釈迦の時代からはすでに1200年ほど経っています。同じ仏教でも中身はまったく異なるのです。

自分としてはマンダラのイメージというか見方が一番変わった。この授業を通して、いろいろ見方が変わったと思う。

見方が変わることが大事です。

武力で仏教への帰依を迫るというのは、「西遊記」の中で観世音菩薩が善財童子を帰依させるシーンでも見られましたが、やはり異様なものに思えました。授業の最後に「作品を見て『きれいだな』とか言いつつ、われわれは何も見えてはいない」と先生がおっしゃったのが印象に残りました。物事を反復して考えないと、新たに始まることがないなら、私たちはお寺めぐりをしながら、ずいぶんもったいないことをしていたのだと思いました。

「もったいない」と気づくところが重要なのだと思います。